

P-36

Handwritten text, possibly a name or title, written vertically in cursive script.

|     |
|-----|
| 251 |
| 56  |



なぐさめぐさ目次

○慰問の状

○軍隊慰問の一新法

○紀念愛國婦人會に就て

論 說

天理教は厭世教なるか樂天教なるか…敬天堂主人

○靈魂不滅の證據……………全 上

○宗教の本分……………全 上

○信仰の勝利……………

○天理教の特徴……………

○斯道は何故に興りたる乎……………奥谷富士太郎

○宗教雜感……………

講 話

○信徒の使命……………

○人を去つて神に就け……………

○如何したら眞理を知ることが出来るか……………

○教育と宗教……………

小 説

○愛の化身……………

文 苑

○げんげ……………

なぐさめぐさ

慰問の状

敵國なる露西亞に在りし、名譽の俘虜として、淋しき其日を送りたまふ。我が日本帝國の戦闘員非戦闘員の諸君。諸君は其職の戦闘員、非戦闘員たるに拘らず、一び徴されて戦地に向ひたまふからは、彼の「海行かば水漬屍、山行かば草生屍」ナ君のへにこそ死なめ、かへり見はせじ」と歌ひたる、古の日本武士の日本魂を心として、事に従ひ、不幸にして事ご志ご違ひて、今のおん身ごなりたまひしなれば、只命を天に任して従容自若ごしてゐたまふごは、今更妾等が申すまでもなきごにはべれごも、妾等紀念愛國婦人會



會員の者よりして、諸君の上を見まらすれば、壯心未だ酬るずして、身先づ躓くの御遺憾の程、察しまるらするに餘りあり、現に海に陸において戦争に従事したまふ、海陸の御軍人は更にも言はず、名譽の戦死を遂げ、名譽の負傷をしたまひし人にくらべて、尙一層皇家の御爲、日本の爲、國民の爲に、非常なる辛酸を嘗めた



目次

慰問の状

軍隊慰問の一新法

紀念愛國婦人會の成立

論説

天理は那世敵なるか 兼天敵なるか 兼天皇主人

聖魂不滅の證據

敵の本分

信仙の勝利

大聖教の村

新道は何故に此の道か

明治二十六年

講話

信徒の使命

人としての神に就け

如何したる真理を知ることか出来るか

教育の意義

愛の化身

文

死

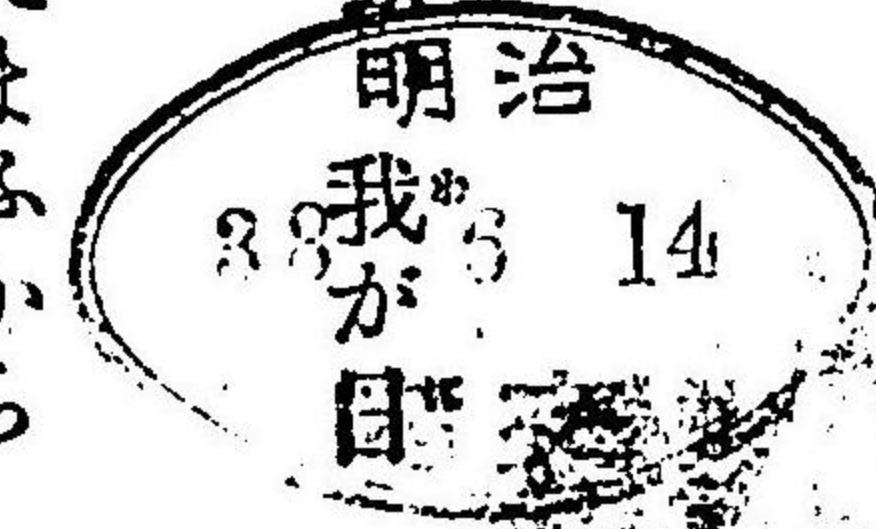
白ひん

なぐさめ



慰問の状

敵國なる露西亞に在りし、名譽の俘虜として、淋しき其日を送りたまふ。明治二十六年八月十四日我が日



諸君は其職の戦闘員、非戦闘員たるに拘らず、一び徴されて戦地に向ひたまふからは、彼の「海行かば水漬屍、山行かば草生屍」大君のへにこそ死なめ、かへり見はせじ」と歌ひたる、古の日本武士の日本魂を心として、事に従ひ、不幸にして事志違ひて、今のおん身となりたまひしなれば、只命を天に任して従容自若としてゐたまふことは、今更妾等が申すまでもなきことにはべれども、妾等紀念愛國婦人會員の者よりして、諸君の上を見まらすれば、壯心未だ酬あらずして、身先づ躓くの御遺憾の程、察しまるらするに餘りあり、現に海に陸において戦争に従事したまふ、海陸の御軍人は更にも言はず、名譽の戦死を遂げ、名譽の負傷をしたまひし人にくらべて、尙一層皇家の御爲、日本の爲、國民の爲に、非常なる辛酸を嘗めた



まふなれば、切めて心ばかりの品物なりと贈りて、いさゝかにも慰めまもらせんものご、其筋に就て問合しはへりしに、何を申すも千里を隔つる土地なり、且は種の規則ありて、何事も心に任せかねはべれば、寧ろ何の障りも無くて、而も諸君の御心に、眞の慰め、清き慰め、高き慰めを興へまもらすことの得らるゝ、眞の言、清き言、高き言を贈りまゐらすこそ宜けれご、妾等の信ずる天理の教を宣傳ふ機關として、道の友といふ雑誌を發行さるゝ、大和國山邊郡丹波市なる天理教本部附屬の道友社の編輯諸君に、此事を告げて賛助を請ひはべりしに、編輯諸君には此上なき美擧なりとて、やがて論説、講話に、清らかなる小説、詩歌俳諧をさへ添へて賜はりたれば、なぐさめぐさといふ名をつけ、これなる一冊子を印刷して、その名のなぐさめぐさとして、諸君の座右に呈し奉るごはなしぬ。

諸君が之を閲したまふて、妾等が期する如く、眞の慰め、清き慰め、高き慰めを得らるゝのみか、猶之に加へて、妾等が信ずる天理の教の旨をも味ひ、之に依て神の恩頼を被りたまひ、單に一時の慰藉に止らずして、永遠無窮に安心立命を得たまはば、是に過たる妾等の歡びははべらぬなり。

諸君よ、諸君は、風俗を異にし、氣候を異にし、飲食を異にし、習慣を異にする郷の地に、たつきなき俘虜の身としておはするなれば、ごりわけ起居に心を用ひて、疾病の憂に罹らぬやう、厚く自ら衛りたまへ。

神は忠勇なる諸君の上を護りたまひ、近き將來において、錦を着て故郷に還るの榮を興へたまはん、妾等はその事の一日も早からんことを、日夕に神に禱りつくあるなり。

日本帝國愛知縣三河國豐橋町大字港町九拾五番戶

紀念愛國婦人會會員惣代

- 白井いく子
- 酒井まさ子
- 林かね子

我日本帝國海陸軍人及非戰鬥員にして

名譽の俘虜として露國に在したまふ

忠勇義烈ある諸君の御許へ



### ○軍隊慰問の一新法

出征軍人の勞を慰め、又其家族の鬱を安むる爲に、種々なる物品を寄贈すること、近時殆ど流行とも云ふ可き程の傾きである、菓子や煙草を贈るあり、鼻紙を贈るあり、手巾を贈るあり、扇子を贈るあり、中に就いて繪端書と慰問袋の寄贈、尤も軍人の歡ぶ所なりと聞く。

軍人軍族に物品を寄贈して、其勞を慰め其鬱を安むる、是又國民後援の一方として、最も賞賛す可き美舉たること、今更云ふを俟ざることであるが、我人天理教徒たる者は、世間普通の人の一列に、單に物品を寄贈するのみを以て、軍人軍族に對する義務了れりとして、心を安んじて可なる歟、否、未だ以て可とす可らずである。

然らば如何にせば可ならん歟、他無し、形而下の物を贈ると共に、形而上の物をも贈らねばならぬ、身の糧と共に心の糧も贈らねばならぬ、而して形而上の物、心の糧とは何である歟、是則ち吾人天理教徒が神より被りて、爲に身の禍害を脱れ、心の塵埃を去り、無限の慶福を得て、安心立命の境に入り、日夕感謝措く能はざる所の

の、其恩頼、其慈愛を頼ちて、之を軍人軍族に寄贈し、戰場に在る人も、家に在る者も、共に天理の玄妙に參し、神魂不滅の理を究め、天命に安んずることを得せしむるのである。

抑も軍人軍族の慰問として物品を寄贈することは、前にも申す如く、國民後援の一方として、且は同情發表の一方として、素より美舉たるに相違なきも、其飲食物たる菓子の如きは、之を口にする瞬間、所謂咽喉三寸を過る間甘味を感じるのみ、煙草の如きも亦、之を吸ふの瞬間、僅に二三の煙の輪を吹く間快味を感じるのみ、而も兩者とも胃に害あることを免れず、鼻紙の如き、手巾の如き、扇子の如き、孰も日用の重寶品たるを失はざれども、僅に一部分の便用を達するのみ、中に就て尤も軍人の歡心を博すに稱せらるゝ繪端書の如き、始めに描ける其畫を見て美感を發し、後に己が心情を書して郷信に用ふ、即ち趣味と實益の二つを兼ねる重寶便利のものなれども到底一時の快を得、一時の用を辨するのみ、而も流行の甚しき遂に風俗壞亂の惧ある繪端書を製して、之を戰地に鬻ぐ者あるに至れりと聞く、此の如くなれば繪端書は士氣を弱むるの害あるものなりといふ評を免れず、慰問袋の如きは其名



その物共に優美にして、之を手にせる兵士が、ソモ、誰人が如何なる物を此中に入れて寄贈されしか、恐く妖姚たる淑女が吾等軍人遠征の勞を慰せんが爲、誠意に種々の品をこめたるならむ、其中には心の憂さを忘草なる煙草もあらん、身の垢と鼻涕と共に心の思ひをも拭ひ去る、手巾もあらん、鼻紙もあらん、久々にて母國の明媚なる山水を見する寫眞もあらん、優美なる風俗を忍ばず繪端書もあらん、菓子ば東京の榮太樓の、見るから口に津のたまる甘納豆が、大阪の製菓會社の、名を聞くも優しい娘印のビスケートか、なご、先づ様々の想像を逞ふして好奇心を飽しめ、然る後に其中を撿めて、想像が中れば喜び、當らざれば笑ひ、又、軍人同士との寄贈されたる袋の中の品を示し合ひて、或は誇り或は評して興を遣るなご、實用と興味との二つを兼て、而も些かの害なきものご雖も、依然其用も其快も時間的であつて、決して永遠の快樂ではない、長久の慰安では無い、彼等の人々をして、永遠に長久に快樂と慰安を併せ得せしむるものは、吾人天理教徒の寄贈すべき、イナ、分賦すべき神の恩頼である、神の惠愛である。

然らば如何にして此神の恩頼、神の惠愛を寄贈す可きか、分賦す可きか。家に在る

軍族の鬱を安むるには、其地方々々の教師教徒の人々競ふて其家を訪ひ獻身犠牲の教理を説話し、夫たり子たる者が出征して、國民たるの義務を全ふするからには、其妻たり親たる者は亦、家に在りて、業に勵み、事を治め、子弟の教育を疎略にせず、夫たり子たる者をして、後顧の憂なからしむるやうにして、共に國民の義務を全くしなればならぬ、是が天皇に對する忠義、國家に對する眞情、こりも直さず神明に對する信仰であることを知らしめ、教理を説話して、神の在ることを知り、一意専心に神に憑り、神に凭れ、神に縋り、神を信じ、身の禍害を去り、心の塵埃を拂ふやう心がくれば、自然に神の恩頼と神の惠愛を被つて、惡を去り、善に就くここか出來、夫と共に眞實の平和と幸福が得られて、歡天喜地の妙境に登ることを得らるゝことを信ぜしめ、永遠の快樂と、長久の慰安を與へるやう勤む可きである。

又、出征の軍人諸君には、教師教徒の人々が戦地に出張して、親しく理を説き道を話して、快樂と慰安を與ふ可きは云ふまでもないことであるが、五十萬の出征軍人に向ひ、數萬の傷病兵に對して、一々直接に教を説んことは、限りある教師と教徒の人々を以ては、とても成し得べきことでないから、或は天理教典を贈り、或は



御神樂歌を寄せ、或は道の友(天理教唯一の機關雜誌)を呈し、或は天理教の教理を述たる冊子を進め、之に因て間接に吾天理教の教理に由て献身犠牲の眞意を辨へしむると共に、國民の本分を了らしめ、倍々忠君愛國の念を強からしめ、尙一步進んで、現御神たる天皇の在しますと共に、天理の大神の在ることをも知り、神に憑り、神に凭れ、神に縋り、神を信ずる者は、生死共に靈魂は長く愉樂の天資を全ふし、無限の慶福を得ることをも知らしめ、假令其肉体は、草むす屍、みづく屍となることも、靈魂は永遠不滅にして、長に靖國神社に於て護國愛民の神と崇めらるゝの眞理を了解して、大君のへにてそ死なめ、かへりみはせじの勇猛心をいよゝますく奮起せしむるやう、いたさねばならぬ。

今回紀念愛國婦人會に於て、前述の趣旨に基き、慰問の一新法として、天理教の論説、講話等を蒐輯め、なぐりめさぐりといふ名を附したる冊子數萬部を印刷し、之を出征軍人と其家族に贈呈し、他に率先して天理教徒、否、日本國民の本分を盡さる。其特志に感して其美舉を賛すること共に、常に思ふ所を述て以て一般天理教徒諸君に勸告す。

### ○紀念愛國婦人會に就て

白井 いく子  
 酒井 まさ子 謹述  
 林 かね子

### △設立

我が天理教の教旨は素より廣大深遠にして、容易く之を學び容易く之を行ふ可らざるは、妾等が申すまでもはべらずかし、妾等は常に其教理の一端として、日本國民としては、神を敬ひ、皇を尊び、國を愛せざる可らず、又、其心を以て人をも愛せざる可らざることを教へられ、個人としては、同情(たすけあひ)献身(ひのさしん)の二つを以て、己が大神(おほみかみ)おやさまより被りたる恩頼(みめぐみ)を人に施さんことを教へられ、之を實踐躬行して、報恩謝徳の道を全ふせんことを心がけつゝありはべりしに、ゆくりなくも日露開戦の事ありて、我が大和民族ある五十萬の同胞は、皇軍に徴されて征途に上り、海行かば水濱屍、山行かば草生屍、額に箭は立つとも背に箭は立てずの日本魂を奮起して、陸には堅陣固城を破り、海には巨艦大船を碎きて、攻れば取り、戦へば勝ち、世界に比類なき武威を輝かし、歴史に見ること稀ある勳功を建られ、即ち敬神尊皇、愛國の三つの務を全ふせらるゝに際し、妾等天理教徒たる者、豈に同情(たすけあひ)献身(ひのさしん)の二つの誠をいたして、國民後援の一端を盡さざらむや。爰に妾等三人其身の信無く力乏しきをも願



す、發起人として、只管大神(おやさま)に凭れ、総りて、出征の軍人と留主の軍族の人々を慰藉めまらせ  
んために、去年の四月を以て記念愛國婦人會あるものを設立して、愛知縣三河國豊橋町大字湊町九拾五番  
戸白井忠次郎の家を以て、其事務所とは定めぬ。

△事業

爾來妾等三人心を一つにして「よくをわすれてひのさしん」の大神(おやさま)の教を奉じ、東奔西走、熱心に  
敬神、尊皇、愛國、愛人の教理を説き、此際奮つて國民の後援たる奉公の誠をいたし、以て神の爲、皇の爲  
、國の爲、人の爲に盡さざる可らざることを勸誘いたしはべりしに大神(おやさま)の御言に違はず、創立よ  
り今日に至るまで、僅か一年あまりの月日を経るに、妾等の微衷を諒し、否、大神(おやさま)の御心に感  
じて、競つて替同せられし人々、無慮一千六百五十餘名の多さに及び、其内一千三百四十名は賛助會員、三  
百十二名は通常會員にて、寄贈の金額も亦參百六拾九圓の高に上りぬ。今其寄贈金を以て後援奉公の一助  
に供へたる概要を記さんに

- 金 五 拾 圓 三十七年六月三日 陸軍 恤兵部 寄贈
- 同 同 同 海軍 恤兵部 寄贈
- 金 六 拾 圓 同 年八月中 豊橋十八聯隊定備出征軍人三千名ニ塵紙寄贈
- 金 百 六 拾 貳 圓 卅七年九月ヨリ 三河國渥見郡各町村出征軍人遺族ノ赤貧者各
- 金 七 圓 卅八年二月迄三回 一月ニ付一圓宛寄贈
- 戦死將校七名香資寄贈

| (學生數) | (村名) | (學校名)       | (校長氏名) | (學生數) | (村名) | (學校名)      | (校長氏名) |
|-------|------|-------------|--------|-------|------|------------|--------|
| 貳拾八名  | 豐橋町  | 高等學校々々長     | 藤森彦男   | 四拾名   | 臨江   | 尋常高等小學校々々長 | 今村幸次郎  |
| 貳拾七名  | 全西郡  | 學校々々長       | 瀧美元治   | 七名    | 同龜山  | 尋常小學校々々長   | 長神梅藏   |
| 拾九名   | 全南郡  | 學校々々長       | 兒島 温   | 參拾貳名  | 中山   | 尋常高等小學校々々長 | 彦阪壽一   |
| 四拾四名  | 全東郡  | 學校々々長       | 多代寅三郎  | 貳拾壹名  | 伊真湖  | 尋常小學校々々長   | 鈴木信太郎  |
| 拾八名   | 花田村  | 立學校々々長      | 平井四男太  | 參拾貳名  | 細切   | 尋常高等小學校々々長 | 辻 明    |
| 四拾四名  | 吉田方村 | 立尋常高等學校々々長  | 石田 一   | 拾七名   | 和地   | 尋常高等小學校々々長 | 八木友治   |
| 拾八名   | 李呂村  | 立尋常高等小學校々々長 | 小柳津廣三郎 | 參拾四名  | 若戸   | 尋常高等小學校々々長 | 鈴木里吉   |
| 拾四名   | 福岡   | 尋常高等小學校々々長  | 成 潮 清  | 拾名    | 赤羽根  | 高等小學校々々長   | 北村信太郎  |
| 拾貳名   | 磯部村  | 尋常高等小學校々々長  | 鈴木三四郎  | 拾名    | 同村第一 | 尋常小學校々々長   | 太田清右衛門 |
| 五名    | 高師   | 尋常高等小學校々々長  | 梶村勝太郎  | 八名    | 同村第二 | 尋常小學校々々長   | 長谷川 保  |
| 貳名    | 野依   | 尋常高等小學校々々長  | 山木田 淺治 | 參拾四名  | 高松   | 尋常高等小學校々々長 | 政 次 郎  |
| 四名    | 植田   | 尋常高等小學校々々長  | 河合末治郎  | 四拾六名  | 六連   | 尋常高等小學校々々長 | 神戶 瀧太  |
| 貳拾貳名  | 大崎   | 尋常高等小學校々々長  | 奥平又三郎  | 拾五名   | 豐南   | 尋常高等小學校々々長 | 清水門吾   |
| 貳拾六名  | 老津   | 尋常高等小學校々々長  | 彦坂利作   | 六名    | 同村第一 | 尋常小學校々々長   | 伊藤 矩一  |
| 拾八名   | 杉山   | 尋常高等小學校々々長  | 松井義四郎  | 七名    | 同村第二 | 尋常小學校々々長   | 加藤式太郎  |
| 七名    | 相川   | 尋常高等小學校々々長  | 鈴木澄藏   | 貳拾六名  | 高根   | 尋常高等小學校々々長 | 飯野市藏   |
| 六名    | 全村   | 尋常小學校々々長    | 川澄義幹   | 參拾壹名  | 小澤   | 尋常高等小學校々々長 | 藤井榮藏   |
| 參拾貳名  | 神戶   | 尋常高等小學校々々長  | 村田林次郎  | 參拾名   | 細谷   | 尋常高等小學校々々長 | 宮田彌太郎  |
| 四拾五名  | 田原   | 尋常高等小學校々々長  | 古川松藏   | 七名    | 谷川   | 尋常小學校々々長   | 春木久三郎  |
| 七名    | 同町加治 | 尋常小學校々々長    | 安田鯉三郎  | 拾九名   | 大川   | 町高等小學校々々長  | 永 田 英  |
| 參拾壹名  | 童浦   | 尋常高等小學校々々長  | 渡部長教   | 五名    | 大久保  | 尋常小學校々々長   | 川合和三郎  |
| 拾八名   | 野田   | 尋常高等小學校々々長  | 酒井岩吉   | 參名    | 仁崎   | 尋常小學校々々長   | 徳島忠次郎  |
| 參拾壹名  | 泉    | 尋常高等小學校々々長  | 間瀬半助   | 拾貳名   | 豐岡   | 尋常小學校々々長   | 鈴木松治郎  |
| 貳名    | 同宇津江 | 尋常小學校々々長    | 鈴木己之太郎 | 六名    | 同村東田 | 尋常小學校々々長   |        |
| 拾壹名   | 清田   | 尋常高等小學校々々長  | 松浦規知雄  | 名     |      |            |        |



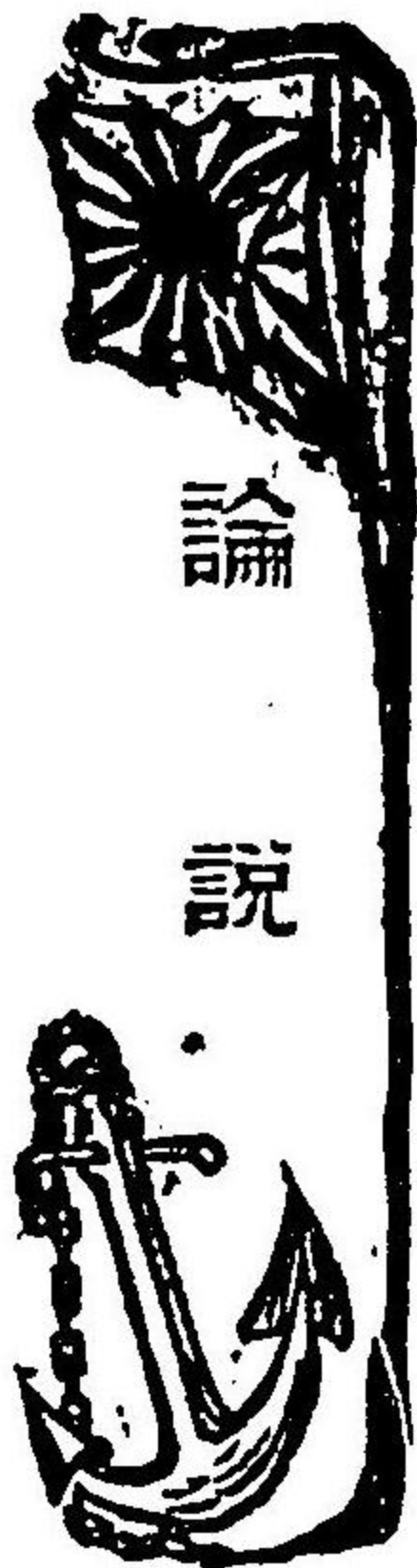
以上三十六ヶ町内四十九小學校における、軍人家族昇校の生徒に對し、筆一對づゝを、其父兄の出征慰問の爲として贈り、尙金壹圓を天理教本部軍人遺族子弟學資金補助の内に寄贈いたしぬ。

### △冊子の寄贈

右の手續きに依り、本會の働さとして、國民後援の一端にもやど、いさゝか奉公の誠をいたしはべりしが、尙能く愚考をめぐらすに、出征の軍人の内にて、名譽の戦死者、名譽の負傷者、夫等にも尙彌増して、妾等が尤も同情を寄す可きは、不幸にして捕虜となり、宗教、言語、風俗、習慣、氣候、食物等を異にするる、千萬里外の敵國に在る吾が同胞の君達にこそ。彼の君達には、素よりその生命を皇と國とに捧げたる人々にておはせば、調の伊企難が捕虜となりて尙新羅の兵を罵り、其死を潔ふせし如き氣概あり、大伴部の博麻が新羅に於て唐兵に虜はれながら、尙その身を奴隸に賣り、其金を以て友を助けて本國に歸し、敵狀を奏上させたるが如き操節あることは、今更妾等が云ふまでもなきことにはべるが、其は君達の覺悟にして、此く本國にありて豊かに安らかに其日を送る妾等同胞たる者、不幸なる君達に對して、争で一片慰藉の心をいたさでやはと思ひ起して、様々と思案をめぐらし、又其般に就ても便宜を問合せばべりし結果、物を贈りて君達の肉を慰むるに由なければ、寧ろ言を贈りて君達の靈を慰めまゐらす可し、夫には、大神(おやさま)が、妾等天理教徒たる者、其御教に依りて、心の埃を去り、神より賦與へたまふ本性に歸り、神を敬ひ、皇を尊ぶの道を怠らねば、必ず惠愛を垂れたまひて、一切の禍害を脱却れて、生るも死るも共に靈魂に永遠の愉樂を全ふすることを得せしめたまふ、其無限の慶福を彼等の君達にも分けまゐらせ、夫に依りて妾等と共に、

彼等の君達も亦、此の天理の眞教に歸し、大神の神恩に浴したまふやう、誘導まゐらすこそ、眞の慰藉あらめと思ひ得しまゝ、斯道の教師達が妾等教徒に向ひて、天理の教旨を教へられし、論説、講話等數篇を蒐輯めて、天理の福音の名を附け、一の冊子とあして數千部を印刷し、遙に之を寄贈りまゐらすこととはなしぬ。

嗚呼、不幸にして敵國に名譽の捕虜となりたまふ、吾が同胞の君達よ、妾等紀念愛國婦人會々員一同の、微衷に依て贈りまゐらする、此の天理の福音を聽きたまふて、妾等と共に天理の大神(おやさま)を信じ、天理の大道に入り、心の埃を去り、性の本に歸り、一切の禍害を脱れ、靈魂不滅の眞理を悟り、永遠愉樂の境に遊び、其身敵國に捕虜たることを忘れて、此世の極樂たる甘露臺上の人とありたまへ、「あしきをはらふて、たすけたまへ、てんりかうのみこと」



### 天理教は厭世教なるか 樂天教なるか

敬 天 堂 主 人

天理教は厭世教あるか、樂天教あるか、此の疑問に答辨せんと欲せば、我教祖の垂訓に徴するに如くは、



教祖は此の世界即ち是れ極樂なりとの玉へり、又其の心清淨なるものは極樂を見るを得べしとの玉へり、又宇宙の眞宰なる神は人類の幸福なる状態を觀て無上の欣感を表すとの玉へり、

是等教祖の垂訓に徴するに、我天理教の厭世教にあらざりて樂天教あること論を待たず、蓋し厭世教とは此の現世界の快樂と苦痛とを比較して、苦痛を快樂より多しと斷定するの主義あり、樂天教は之に反し、苦痛を滅滅し快樂を増進することを得べしと斷定するの主義なり、要するに我天理教は全智全能の活ける神を有す、而して此の神は吾等人類の幸福を目的とし玉へば、我天理教が厭世主義にあらざりて樂天主義あることは、教理上當然の結果ありと云はざるを得ざるなり、然るに現世界の状態を觀察するに、不義悖徳横行して正義公道輝光を晦くし、強は弱を凌ぎ、大は小を暴し、善は亡びて惡は榮へ、天災地變あり、飢饉疫癘あり、貧者貧に泣き、苦者苦に叫び、苦痛は多くして快樂は少し、決して圓滿幸福の世界と云ふべからず、是れ數千年前に印度の釋迦氏が厭世教を唱へたるが如く、十九世紀の歐洲大陸にシユウペンハーワー、ハルトマンの諸氏が厭世教を唱ふる所以あり、然らば現世界の多苦少樂なる状態と一致するの厭世教は、夫れ終に眞理なるか、曰く然らず、違は泥中より生じて美花を發す、違の泥中に在るを觀て其美花を觀ざるものは、是れ違の發達に著眼せざるものあり、噫人世觀亦た然り、

我教祖は樂天主義の福音を唱へ玉ふと同時に亦た此の世界の苦をも見玉へり、實に苦界に呻吟するの人民を憐み玉へり、然れども此の世界の禍害は何時しか晴れ渡りて幸福の太陽煌々として輝光を放たんことを見玉へり、是れ無限の希望あり、無限の光明あり、而して教祖はソクラテスよりも釋尊よりも基督よりも孔子よ

りも一層偉大にして一層確實なる人類の指導者なり、然らば教祖は如何なる手段によりて、不完全なる世界が完全なる世界に變化するを認め玉ふか、一は靈教の教によりて世界人類が各自の心塵を去り、清淨光明の本性に復すること、二は神が人類をして圓滿智徳の域に到達せしめんが爲めに、種々の境遇を經過せしめ玉ふこと是れなり、前者は道德法あり、後者は進化法なり、此の二者は教祖之を垂訓に示めし玉ふて特に深切著明を極めたり、

夫れ然り我天理教に従へば、禍害は滅滅すべからざるにあらざり、幸福は増進すべからざるにあらざり、死は打ち勝つべからざるにあらざり、生は勝利を得べからざるにあらざり、而して圓滿幸福の極樂を現せんことは眼前に在り、是れ我天理教の教理が全世界の最も進歩したる多數人類の理想と一致する所以あり、

上に指名したるハルトマン氏は、人類は其の發程の初期に於ては圓滿ある幸福を現世に得べしとの空想を抱きたりしが、其の不可能なるを悟りて失望し、次に現世に之を得るの難くして未來世界に之を得べしとの空想を抱きしかども、是れ亦其の不可能なるを悟りて失望し、今や又科學の進歩によりて之に到達せんと盡力しつゝあるも、亦必ず失望に終るべきを論じたり、

ハルトマン氏の論の如くなれば、宗教も科學も人類を圓滿幸福に導びく力なくして、人類は究竟苦界を脱する能はざるものなり、是れ氏が我天理教あるを知らざるが爲めのみ、我天理教は氏の哲學の如く論理によりて築かれ、科學によりて装はれ、美妙壯麗の觀を有するものにあらざりとも雖も、短刀直入眞理に到達して無限の味あり、是れ一知半解の生學者には或は却て唾棄せらるべきも、深奥なる大哲學家は大に之を玩味せん、



老子云はすや下士聞道大笑不笑不足以為道と古今同く然り、

### 靈魂不滅の證據

同上

神は果して實在するや否や、靈魂は果して不滅あるや否や、此の二個の問題は世界宗教の死活問題なり、何となれば世界の各宗教は此の二個問題の肯定的解答の基礎の上に立てばなり、然るに靈魂不滅の問題たるや、滅不滅共に人知の範圍外にありて確證なしとするは、今世實學の定説あり、蓋し靈魂とは吾人心意の本體を指稱するものにして、吾人が此の本體の實在を知るは現象に就て之を推知するに過ぎず而して現象の示めす所の外吾人は本體に就て知る所ならず、然るに吾人心意の現象は意識によりて統覺せらるるものにして、吾人死と云ふ無常の風に襲はれ、溘然長逝すると共に意識の波浪忽ち熄めば、心意の現象は零無に等し、而して猶ほ本體の滅不滅を證明するの根據わらんや、佛教は其の起信論によりて、眞如に不變眞如、生滅眞如の二種（體相の關係あり）あるを説き、又生滅眞如は妄想差別により、不變眞如は妄想差別の外にあるを説く、其論理によれば、靈魂は不滅なるに似たり、然れども其の所謂不變眞如なるものは、宇宙方法の眞實體を指稱するものにして有意的にわらず、然らば吾人個々心意の本體に名けたる靈魂とは全く別物なり、豈に不變眞如説と靈魂不滅説とを同視することを得んや、或は吾人の靈魂は無形なり、無形あるが故に壊滅すべからず、又單一なり單一なるが故に分析すべからずと論證するものあり、是れ希臘のプラトンより基督教の各師父等に至るまで頗る有力なる議論なれども、心意の現象によるの外、心意の本體即ち靈魂に就て知る所わらずと云ふ實驗説勝利を占むるの今日に在りては、此の論證も亦薄弱なるものあるを免れず、然らば靈魂不滅の説は是を去りて他に之を求めざる可らず、

唯だ夫れ今日に在りて靈魂不滅を證明するに猶ほ有力なるものは、類推的論證にあるか、此の類推的論證は直證にわらずして、傍證なり、然れども其の直證にわらざるが故に、決して勢力を減せざるあり、今此の類推的論證に従へば輒ち云ふ、凡そ此の世界にあるの各生物は一に其の欲求する所を満足することを得、二に其の發達を完全にすることを得べからざるはなし、而して吾人のみ獨り然るを得ず、是れ豈に自然の理法ならんや、是れ靈魂の必ず不滅ならざるべからざる所以あり、試みに彼の植物を觀よ、植物は其の生長に必要な要素を吸取するに適當なるの機關を有す、故に此の機關に相應じて外界に光、熱、空氣、水、地味の實在あり、而して吾人人類は其の心意の天性として極善、極美、極眞の境界を欲求すれども、是は現世に於ては唯だ主觀的理想に止まりて客觀的之に對するの實在を發見すること能はず、然れば現世は是れ一層完全なる世界に進むの準備たるに過ぎずとの論證は確立することを得べし、是れ靈魂の不滅ならざるべからざる所以あり、願ふに古今萬國の人が靈魂不滅を唱ふるものは、客觀的事實に基くよりも寧ろ主觀的要求に基くものなり、之を詳説すれば此の欲求は吾人をして靈魂不滅の希望を生ぜしむ、而して彼のミル氏の如きは小乘佛教が寂滅を目的とするを以て世界に靈魂不滅を希望するものゝ無き理由とすれども此の如きは例外又は變則の事實にして決して人性本來の自然に非るあり、人性本來の自然は無限欲求にあること疑ふ可らず、



然るに或は説をなして曰く人類の此の無限欲求は、個々の人として到達することを得ずと雖も、進化の理に由り人類全體の將來としては到達することを得べし、又何んぞ各人靈魂不滅を論證するの必要あらんやと、此の説が一考するに足るの價値あることは吾人之を疑はず、然れども人性本來の品格を蔑視するや亦甚し、何と云れば人類の責任性即ち道義法を認めざればあり、然らば以上類權的論證は何づくに淵源するや、吾人佛教に於て之を發見せず、又婆羅門教に於て之を發見せず、唯だ希臘哲學及び基督教に於て其の淵源を認む、是れ人性の論理に於て吾人が二者に負ふものゝ極めて大なる所以なり

### 宗教の本分

同上

宗教の本分とは何であるかと云ふと、真理に依て人之助けるのである、今少し詳細に云へば、人に神ある事を知らせ、神の子たる事を知らせ、其道を信じさせ、其教を守らせ、眞の人と成て、神の子と成て、而して働かせるのである、白いもあり、黄いもあり、赤いもあり、黒いもあつて其色こそ違へ、人に變りは無、否、造主たる神の目から見れば、五大洲の人皆同じ吾子である、然れば其人を助ける宗教も、勿論同仁博愛、世界的で無ければならぬ、なれども、太陽は一つでも、之に向ふ國に依て、其熱を受くるに、熱帯温帯の等差が有て、其等差に因て、其國に發生する物質に異同があると同一道理で、宗教も又、其國に相應しければ成らぬ、言を換へて言へば、宗教は世界的であると共に、又、國家的で無くては成らぬ、吾天理教は、其名の天理に従ふのである、教祖には、常に世界一列の語を唱へ、あしきをはらふて助けたまへ、と、祈られ、眞理に依り、神道に従ひ、敢て人種の異同を問はず、邦土の東西を論せず、同仁博愛一列に之を助くるを本願とされたれども、又本末の分を忘れたまはず、……之を木に譬ふれば、日本は根で有る、外國は枝である、枝は顯れてゐて、自然人の目に附き易い、夫故に、大ききも、壯んにも見へる、根は藏れてゐて、容易に人の目に觸れぬ、夫故に、小さきも、見すばらしくも想はれる、併しながら、枝は何程榮えて見へても、根が無れば片時も保たぬ、枝は風に吹れ雪に壓されて折れる憂ひがあれど、根は滅多に其様な氣づかひは無い、又、枝葉は春夏の間は、花が開いたり、葉が繁つたりして、如何にも美しく時めいてゐるが、秋冬になると、その花も散り葉も落ちて、然も其花も葉も其根の肥料に成る、是と同じ道理で枝葉の外國は華美で、根の日本は質朴である、又、外國は木の枝に花や葉を着けるやうに、日本に先つて文明に進み、種々發明創造をすれど、即て皆夫を木の根の日本へ來て來て、その開化の資料にする……と仰せられて能くその本分を明にせられた、

然れば吾天理教は、人種の異同を問はず、邦土の東西を論せず、一列に助ける其中に、自ら他本分の差別が有て、乃ち同仁博愛の世的界で有ると共に、本を養ひ根に培ふところの國家的で有て、能く宗教の本分を全ふしてゐる、



宗教の本分が、人を助くるものならば、人に無くて成らぬ、道徳倫理を教へなければ成らぬ、夫故に、佛敎は諸聖賢作諸善奉行と説き、耶敎は博愛慈善を教へてゐる、けれども前に云た通り、同じ太陽の熱でも、之を受くる國に依つて、熱温の等差があり、其熱に因て發生する物質に異なるのである道理で、佛敎の説ける道徳倫理は、自然其本國の印度には相應しても、日本には適合らぬ所がある、耶敎の教へる道徳倫理もその通り、歐米諸國には相應しても、日本には適合らぬ所がある、然れば、佛敎耶敎とも、之を日本化させなければ、相應當といふ理には行かぬ、現に日本に行はれてゐる佛敎は、既に日本化して、其本國の印度の佛敎とは違ひ、耶敎も亦漸次に日本化しつつあるのである、宗敎以外のものも有て、實に道徳倫理のみを旨と教へる儒敎でも、やはり本國の支那流義そのまゝの、保守的、復古的、階級的、服従主義一方では、今日の進歩的日本人には適合らぬ、否、是さへも往古から日本化して行はれてゐたのである、吾天理敎の教ゆる所の道徳倫理は、佛耶儒の三敎のよふか、他國の輸入品では無い、日本固有のものを、敎祖が、極めて平易に、極めて卒直に教へられたのである、敎祖は此様に教へられた………親子でも、夫婦の中も、兄弟も、皆各自に心が違ふ（お筆先の文）その違ふ心を以て、各自勝手な吾身思案をして、おしい、おしい、おわいの慾を恣にするのが、抑も間違ひの根本で有る、元來人間は皆神の子である、であるのに、神の子であるといふ事を知らぬから各自吾身勝手な思案をする、神の子であるといふことを知れば、自然其親たる神の敎、神の云ふ事を聞かして、之に従ふやうになる、神の敎に従へば、各自の違つた心は、神の心と一つに在る故、父子、夫婦、兄弟、一致和合して、其所で一家が齋ふ、一家が齋へば一國が齋ふ、一國が齋へば世界が齋ふ、………

…水と神とは同じこと、心の欲を洗ひ切る（御神樂歌の詞）神の心には欲が無い、水のやうに清み切てゐる、人の心には欲がある、私欲、我欲、欲は埃である、穢である、神の欲の無い清み切た心の水で、人の心の埃や穢を洗ひ切て下さる………と説れた、一寸と聞くと誠に單純のやうであるが、能く咀嚼めて見れば、道徳倫理の大本をつくしてゐる

其所で又、宗敎は道徳倫理を教へるものとすれば、勿論人道を教なければならぬ、人道とは結局人には天賦の權利がある、之を人々互ひに重んじ合ひ、之を殞はぬやうにしなければならぬといふ理である、が、人が人の權利を殞ふのは、人に欲が有て、その私欲我欲を恣にしやうと思ふが爲に、自づと人の權利を害する事になる

吾天理敎は、前にも云ふ通り、人は皆神の子であるといふ事を第一に信じ、その親たる神の敎、神の心の水に依つて、己が心の欲、私欲の埃、我欲の穢を洗ひ切て、神と同一に成て働けと教へるのである、然れば敎祖の語にも「神の前には欲が無い」不自由さやうしてやらう、神の心にもたれつけ「難儀するもの心から」と云はれて、人間は欲を離れて神にすがれば不自由は無いと教へられ、又「なにかよるづのたすけあひ」と云はれた、人間は同心協力、神に頼て互ひに助け合はねばならぬと教へられ、又「欲を離れて日の寄進」と利己の念を去り、他利の心を以て働けと教へられた、此敎義を遵奉して、人は神の子であるといふ、自由平等の一大信仰に依り、神の命に従つて互ひに助け合ひ、利己の慾念を去り、利他の慈悲心を以て働けば、口に人道を説かずとも、自然に天賦の權利を全ふして、誰も人道に背く者は無くなる理である



以上述るが如く、宗教の本分が、世界的で而も國家的で、道徳倫理を教へ、人道を重んずるものとすれば、吾天理教の如く、其本分を全ふしてゐる宗教は、他に比類が在らぬと云はなければならぬ、併し、如何にその教義が、宗教の本分を全ふしてゐても、其信徒たる者が、其本分を辨へ其本分に従ひ、其本分を行はなければ、恰是立派な看板を掲げて、疎悪い品物を賣つてゐるのと同じ事である、教祖は實踐躬行を重んじられて、公私神人を通じて九十年の長き御生涯の間、少く説いて多く行はれたのであるから、我々信徒たる者も、教祖の心を心として「やさしい心をもつてこい」「夫婦をろふてひのきしん」の優美和樂ある教に従ひ、慈悲の心を以てわくまで他を愛み、一家和合して事に勉し実践躬行、以て神の榮を彰はし、教の光を揚げ、宗教の本分、乃ち天倫に従ひ人道を行ひ、人間の本分を全ふせねばならぬのである

### 信仰の勝利

大神様は生きて居られます、大神様は働いたるゐられます、ソシテ、大神様は善人を援けつゝゐられます、大神様は悪人を亡ぼしつゝ居られます、でありますから、悪人の奸計は大神様の聖意の御實行を妨げる事が出来ません、我等は安心して、善と思ふべき事柄は、厭くまでせねばなりません、此世に在て最も強いものは、何かと申しますに、夫は清い即ち誠の心であります、世に如何程強いものがあつても、之に打勝つ事は出来ませぬ、假令政府でも、國家でも、全力を盡して滅さうといつても、決して亡ぼす事は出来ません、我等は大神様の他は何人を敵に持ても、毫も怖しい事はありませぬ、信仰の土臺の上に立つ所の誠の心は、全宇宙の勢力を擧げて之を逐ひ退ける事は出来ません

人が何事云ふとも神が見てゐる氣を解め

ふたりの心をおさめいよなにかの事も顯はれる

と我が教祖が垂れた御言は確かに此道理を説明せられたものであります、然るに今の世の人は頻りに「勢力」といふことを語ります、彼等は信仰以外に何か勢力といふものがあるかのやうに思ふて、ヤレ議會に多数を有つから勢力があるとか、又は外國人の援助を得たから、事業の成功は疑ひが在りとか申して、善を爲すにも、惡を爲すにも、是非とも勢力なるものが必要であるやうに思つて居ます、併し我等天理教を信する者に取つては、大神様以外、教祖以外、別に何も勢力のあるべき筈はありませぬ、我等の友人と賛成家は、教祖のみでありまして、我等は教祖を親と仰ぐの外世の賛成家は一人も要らない筈であります、又此勢力の外に、世に運動といふことが、御座いますか、運動、我等は甚だこの二字を嫌ふ者であります、是は大神様を信せずして自己の謀略に頼る者の爲す仕事であります、其人達は大神様は眠つて居たまふて人間が働かねば何事も爲し玉はざる者のやうに思ふて居ます、我等天理教を信する者は「運動」をいたしません、我等は大神様は休息なく活動し玉ふと信じます、でありますから我等は一筋に大神様にもたれて、靜かに大神様の命をまら、大神様を我等の裏にお働かせまをして、我等から先きに手を出して大神様の御事業を扶くるなどといふやうな出過ぎた事をしてはならないと思ひます、

ソコテ我等は此宇宙は、大神様の修理固成されたものでありますから、我等は其中に生活して大神様を信



すればそれでよいのであります、然すれば萬事悉く我等の善の爲めに働き、我等の腦中に智恵も湧いて來、我等の肉体も健康に成り、我等に纏綿する總ての情實も解けて、大神様の御榮光を顯はすに至るのであります、我等は世に權謀だの策略などいふことを講じてゐるのを見て、其人等は何の爲めに宗教を信じたのであるかと怪訝に堪へないのであります、嗚呼結構なのは信仰の生涯である、我等は何物をも恐れるには及びません、我等は何にも心配するにも及びません、假令多くの人が起つて我等を毀さうと思ひ、世の力あるものを借りて來ることがありましても、大神様の力はそれより以上でありますから、大神様に便つて誠を盡さねばなりません、

### 天理教の特徴

天理教が他の宗教に異なる一の点は、其の教祖に對する一種の信仰である、儒教には孔子あり、佛教に釋迦がある、火教には、ソロアストルがあるし、回教にはマホメットがある、凡そ世界の大宗教は何れもその開祖を有たぬ者は無けれども、其信徒と開祖との關係、天理教の如きは無い、他の宗教に於ては、勿論開祖は教を垂れたものであるから、之を尊敬せぬでは無いが、其主とする處は、開祖よりは寧ろその立てた處の教である、然し天理教は然るでない、その信仰の目的は教祖であつて、其の教は教祖を信するにゐるのである、有ゆる宗教の内、只耶穌教のみが、此点に於て多少の類似を見るのである、教祖が信徒等を招き給ふに當つて、仰せられた處は「いづれもつゞくるならばはんの根をさらふ」難澁を

救ひあぐればやまひの根を切らふ」といふのがあつた、又教祖が自ら唱へられた所は「此所まで信心したければ本の神とは知らなんだ」此度現はれた實の神には相違ない」といふので有つた、又信徒等に告げられた所は「いづれも靈教がせくからにはやく陽氣に成りて來い」「此所は此世の極樂や私も早々参り度い」といふので有つた、又信徒たちに教へられた所は「欲の無いものなければ神の前には慾はない」「むごい心を打忘れやさしき心に成りて來い」といふのであつた、天理教の他の宗教に比べて、特別な所は、實に教祖が即ち真理で、眞道で、大神であるを信するのであつて、其の教の力のある所も、亦此に存するのである、天理教の信仰は、單純明白で、何人でも解し易い、何人でも信し易い、又實行し易い所は、只教祖を信じ教祖に従ふのであるが、其教に生命があり、人を救ふの力あるのは、其單純明白な信仰に由ると云はなければならぬ、世界の宗教には、眞理とか、道とか、天とか、眞如とか云ふて、兎角抽象的に其教を教へるから一見高尚なやうなれども、之に肝要な生命が無く、活氣が無く、稍もすれば、哲學に變じ去ることがあるのは、全く其教の抽象的であるからである、而して、哲學と宗教の區別は、實は絶對に對して、之を抽象的に理解するので、具体的に理解するのとの差がある、宗教の本領は絶體に對して、人格的個人的關係を有つて居るので、世の宗教が活氣が無く其本體を失ふのは、全く哲學的に流れ去る故であると云はなければならぬ、天理教の信仰は、教祖を信じ、教祖に従ふに依て全ふせらるる者であつて、其教は、徹頭徹尾、具体的にである、だから活氣の存する所も亦實に此所に存するとしなければならぬ、然し乍ら單に教祖の教を守るといふのみでは、未だ眞の教徒といふ事が出來ない、教祖と共に居る、即ち教祖が吾が中に居られるといふ信仰を



得て、始めて、信徒たるの資格を有するのである、  
 諺にも正直の心に神が宿るといふ事がある、それと同じく、吾々の心がやさしく、誠で、即ち心の汚れが、  
 かかつたならば、神はろの中に住居はれる、されば、人の心は大神の宮殿で、教祖が常に我が心中に、存在  
 せらるゝと信するならば、吾々の一言一行は、自然教祖の御言行と同化するに至る筈である、若しも吾々に  
 して、言ふべからざる言を吐く事があれば、是教祖に向ふて、直接に反抗を企てるもので、若しも吾人にし  
 て、行くべからざる所に、行く事があれば、教祖を行くべき所で無い方へ誘ふもので、教祖の御心を痛まし  
 める事、是より大なるは無いのである、吾々が此様な信仰を有つ様に至らば、凡ての誘惑に打ち勝つは勿論、  
 凡ての罪惡と戦ふて、優に勝利を占むる事が出来る、  
 嗚呼吾人に最も必要なものは、この信仰である、人を教ゆるにも、此の信仰を教へねばならない、自ら守る  
 にも亦信仰より貴重なものはないのである、

### 斯道は何故に興りたる乎

奥谷富士太郎稿

今にしてかゝる問題を繰返して、考察するの必要はなきやうに思はれるれども、吾が感ずる所を少しく、書  
 き記しおかん、教祖の御言葉と覺しううちに、子供等をして漸く一人前のものたらしめたりとの、御誡をさ  
 けるが、げにや人類進化の歴史を稽査するに、恰も人間成長の跡にも似たりと言ふべし、人間が呱呱の聲を  
 揚げて、此世に生れいで、幼年期、少年期、青年期、成年期に達する迄の進歩は、人類が書契以後の歴史を

有せる、四千年間の事蹟にさも似たり、當初人類の此土にあるや、智識進まず穴を掘りて棲み、木を撿めて  
 弓となし、石を採りて鏃となし、獸を追ひ、鳥を捕へて喰ふ、或は他部落と闘ひ、亦た和するも何の深く聊  
 む所ありて然るに非ず、其状態禽獸と殆ど擇ぶ所ありし。是れ恰も小兒の石を抛げ、犬を追ひ、喧嘩するも深く  
 憎怨するが故に非ず、小兒や貴賤貧富の別なく親み、亦相争ふことあるも、復た固より相因由する所あるに  
 あらざる如し、これ歴史上の所謂新石器時代の状態に非ずや。

次で人類は青銅時代、鐵器時代、發明時代と漸次進歩し來るの順序は整然として、一糸紊れざる所、總て人  
 間成長に經過するの順序と同一にして、人類が提孩幼穉の域を脱して、健歩獨立の域に達するに、一日の空  
 虛あるなし、歴史も復た一定の軌道を進みて、一年二年の微も無用の道を歩まず、若し五十年百年の日子に  
 間然する所あらば、世界の大勢も亦以て今日の如きには至らざる也。

自殺の如きも、野蠻時代に於ては、絶てなき現象なるも、人智漸く進歩するや、文明は複雑なる社會を  
 構成して、苦痛を伴ひて來り、因縁と相結びて、人は自ら殺すに至る、人類の尙ほ幼穉なるや、無念無想、  
 宗教に於ては自然教胚胎し、拜火教の如きもの起る、敬神の情、倫理的觀念等が發露するに因るに非ず、單  
 に畏怖して神と信じ、復た他を顧慮するの暇なし、人類は智識の進歩に伴ひ、自覺する所あり、現在の自己  
 に不満足つ感を抱き、懷疑苦悶するに至るや、則ち現今の青年の如く、人生問題に迷ひて、歸趣すべきの道  
 を失ひ、往々自ら繫縛を絶つものあるに至る、或は一時の慰安を求むるに急にして、基督教に之を佛敎に走  
 る、是れ未だ求めて眞に得たるものにあらず、吾が皇祖建國當初の目的、國体の如何、人類進歩の究極如何、



人生の歸趣如何、靈魂永生の問題如何を信仰と結び、よく自覺して然るものに非じ、一時的慰安と間に合せ信仰のみ、宜べなり彼等は間もなく信仰を抛棄せるをや、復た道ふに足らざる也。

世人存りに信仰の復活を言ふ、而して信仰の復活とは、基督教或は佛教の再興を意味するが如しと雖も、

之れ思はざるの甚だしきものにあらざるなきか、吾等思ふに佛教も基督教も、二千年若しくは、二千數百年以前に起りて、等しく人類幼年期の宗教なりと謂はざるべからず、今にして之を見るに、荒誕不稽の傳説の混在せるありて、到底智識の進歩せる現人類を、教化するに足るの威力なし、宗教の本躰は不變不磨のものあるべしと雖、基督教及佛教が當初人類に對して、永劫不滅の使命と特權とを賦與せられたるに非ず、人智の進歩に隨伴しては、いかに佛教基督教といへども、運命の司配する所、新陳代謝せざるべからざる所なれば也。

佛教既に我邦に入るに先じて、一大困難を感じ、神佛習合して、印度的佛教は日本的佛教と化し、漸く一時を糊塗したれども、明治に臻るに及では、神佛分離し、佛教は立脚地を失ひ、遠く文明の背後に遺忘せられ、亦終に震はす、最早生存の道を失はんばかりになれり、佛教が既に教化力を我に失へるや、其因遠しと言ふべし、豈管に今日に始らんや、佛教は實に我民族小數者に知らるゝを得たりと雖、畢竟するに普遍的の性質を帯べるものに非らざりき、而して終に永へに滅却せられんとしつゝあり。

基督教にして、普遍的宗教を、吾が民族に移殖せんとせば、先づ吾が民族性情及び國體の如何等を、充分稽查考察し、之と教義とを契合せしめざるべからず、一面には則ち佛教に於ける行基、傳教、弘法等の名僧がさせる如き事業を繰返さざるべからず、釘補綴は現代の如き科學的眼光 銳き世にありて、満足せらるべきにわらず、ア、之れ今代にありては、到底不可能事たるを免れざる也。

世人は又た期待するに、偉人の出現を翹望するものあり然れどもこれ空望のみ、古代にありては智識進まず、學術普遍せず、人民朴質敦厚にして、深く人々相疑ふが如きことなかりしも教育進歩も、人智の開發せらるゝや、人智に大なる軒輊あり、ほど均一の状態を呈し來らんとす、昔時にありては、僧侶、先生と云ふ如き、名稱そのものには、既に一種の力を有して、深く人格品性の如何を顧慮するの遑なく、只管に職掌に因て人を信ず、故に佛教の如きサンスクリットの漢譯經文に依りたるも、尙ほ基督教の羅旬語の聖書に依りたるも同一にして、極めて解し難く入り難き、教理に依て、教化力を繼續せしめ得たる也、今に及で往時の僧侶等が品性行狀を聞くに、實に癡癡に堪へざるもの多し、而して今も尙ほ現存せる所也、

假令以偉人出現するも、昔時の如く容易に偉人の信頼を得ると能はざる所なるべし、人は皆物質的文明の弊に悩まされて、猜疑心深く行往送迎の裡一細一微に至るまで、一に嚴格なる疑念と、批判の眼を以てし、毫も假借する所だになし、是を以て見れば、偉人出現のともと空望には非らざる迄も、信と相伴はずは、偉人の人格を認容すると眞に難からずや。

思ひ見よ現代に於て、クリストの如き人、釋尊の如き人、孔子ソクラテスの如き偉人、出顯して都會の中央に説法したりとて、其の縦横無碍ある超人的布説が、容易く耳裡に入り得べしと信する能はず、ア、現代の人衆して此の如き人に向て迫害を如ふるところなきか聽いて、而して直に世道人心は清廓せらるべしと信す



るか、談復た何ぞ容易なるや、至誠天人を貫くの吾が教祖さへ、二十幾度縲綆の辱をうけ玉ひしにわらずや。

世事は日に忙劇を加へて、餘裕なき社會となれり、貧富共に生活の苦悶を感じ、各人は自己と并に地位を意識し覺醒すべきの時に際し、復た各自は信仰を求めざるべからざるやうになれり、然れども佛敎は入りがたき宗教也、去て基督教の門を叩けば、未だ日本のものに非ず、數百年以前ならばいざ知らず、兩者とも現代に於ては、到底満足なる要求をみたすべくもわらず、人と職業とによれる感化又多く期すべからざるは、既に吾人の謂ふ所の如し、茲に於て乎、斯道即ち興る。

斯道は實に吾人が祖先なる親々の神が顯現せられたるものにして、決して人為的の宗教には非ず、在來の吾が神道は祖先敎とて、祖先の遺徳を追慕して、之を禮拜したるものにはすぎず、久米氏が神道を目して、祭天の古俗なりと言へるは、その當を得たりと謂ふを得ざれども亦た多く争ふを得ざる所あらん、然れども斯道興りて始めて、神道は生命を附與せられて、一新面目を開き、あらゆる、宗教の頂上に立ち、その精神を世界に發揚すべきの氣運を作れり。

斯道は寔に成年期にある、人類を薰化せん爲に、長くも大神の表に顯はれ玉ひし所、教祖明赫の至徳、神靈に感合し、廣大遠達する世界的宗教を宣傳し給ひしなり、或は修徳の源を教へ、天理の玄妙を教へ、世界同胞同義を掲げ玉ふ、人類は尙ほ野蠻未開の位置にありて、或は水草を追ふの遊牧人種も偏在するけれど、こは僅少の部分のみ、世界の大部分を窺ふ時は、小異合同の氣運に向ひ鷲地に進行し來り、明かに靈性革命の時期亦た到達せるあるを得せざる能はず、吾等は信仰によりて世界各國いづれの人種をも、結合せざるべからず、是を案すには信徒諸氏が信仰を顯するに在るのみ、吾人は實に信徒諸氏が明鏡の塵を掃ひつゝ、常に神に參せらるべきを望まずんばわらざる也。

### ○宗教雜觀

宗教は排すべきか

吾人は果して悉く宗教、若しくは宗教的信仰を排し去ることを得るものなるや、吾人は宗教は未來の賞罰を説く、愚俗の事のみありと斷言し去ることを得るものなるや、是等は宗教學上の大問題にして、又人生の如何に關したるものなれば、輕々に論斷したるは非あり、必ずや深く廣く、且精しく世界の一切の宗教若しくは宗教的信仰を事實上より調査して、然る後徐ろに論斷すべきものなり、余は實に斯く信ず、然して近時の排宗教論文を見るに、頗る惜しむべきものあり、蓋し余のこの思考に反するものあればなり、多くの宗教學者の研究によれば、宗教の儀式典禮を存せずして、而して宗教的信仰を有する人民あり、超自然力に對する信仰心は、凡ての人の自からある心意の傾向あることを證するに難からざる事實あり、又唯現世のみを説きて、未來を説かざる宗教もあり、科學者の科學の眞理に對する信仰は、自ら宗教的なるものあり、宗教上の形式を有せざる、象徴人種にも幽靈魔鬼等の信仰を有せり、モーゼのペンテテークには未來の應報を説かずして、神の賞罰は現世にありといふ、從うてモーゼの猶太敎には未來に對する信仰を有せざるあり、余は兎も



角にも宗教を論せんとするものは、一切の宗教に關したる智識を備へたる後ならざるべからずとなす世、之を備へずして之を論するものは、盲者の色を識別して之を撰擇せんとするが如き滑稽に終らんのみ、

我と非我

我は單に我爲めにのみ生れ出で來れりや、抑も又他の爲めに生れ出で來れりや、これ人生問題中緊要あるものに屬す、その答解は素より多くのペーシを要すべきものなり、然れども、我爲めに勉めたりしときに、攻撃、論難、輕蔑、惡評を受け、他の爲めに働ける時に、稱讚、名譽、尊敬、好評等を受くるは事實ならずや、身を殺して仁を爲せしに貶辭來り、他を害して己をのみ利せりし人に稱讚されるの事實は、極めて稀にして、之が反對は世界の常あり。我を制して非我の爲めに、之を世界の常道、寧ろ宇宙の法理とや云はんか、カントの所謂本體としての人の現象としての人、ケアドの所謂自然的人と神性的の人、クリーンの所謂我と非我とは、即ち體かに人の有したる両面鏡なるに相違なし、而かも、其の我を制し、自然的人、現象としての人たることを避けて、本體的、神性的の人となりたる時、非我の境に達し、而して世界の眞誠なる稱讚、名譽、尊敬好評來る、孔子の仁、釋迦の慈悲、基督の愛は、是我を張るときに發せずして、非我の境に達して圓滿あり、宗教家はこゝに至らしめんが爲めに、教義を解き、教育家はこゝに至らしめんが爲めに、智徳を導く、余は今の世に流行する主我的思想の之に反する結果を得んことを恐る

利己の宗教

未來の宗教を恐れて、現世に善行をなすべしと説くは利己の宗教なり、利己の卑しむべく、憎むべきは苟も道徳心あるものを知る處、公明正大なる宗教の主義は、利己的なるべからず、故に斯の如き利己主義の宗教は宗教の價値なく、道徳の根柢たるべからずと、是近世哲學者の能くいふ處の理論、又一顧の價なくんばあらず、然れども、原因と結果とは、天地萬物の免るべからざる所の連鎖なり、因果律は天下の公法にして、吾人は之を脱却する力を有せず、而かも善惡の應報の現世に於て著るものあるを認め、遊惰は貪薄を生み、勤勉は富厚を作り、殺すもの亦殺され、罵るもの亦罵しらる、之を宇宙の自然的運動なりと見るは、即ち道徳論あるべし、之を或る最高の存在物、又は超自然力の妙に配裁する處なりと見るは、即ち宗教ならん、猶之を弘めて、此の應報未來にも及ぶと説き、その應報は報酬の意味にわらずして、宇宙の倫理的運動を準備するものゝ意に出づる至高無上の法則なりと説かんか、未來の應報を説くも決して單に利己主義に非らざるべし、故に未來の應報を説く必ずしも利己主義の宗教といふべからず。

善意惡果

惡因あれば、惡果あり、善根ありて、善果ならずといふことなきは、古來既に能く人の云ふ所あれども、善意にて成したる事の反て惡果を結ぶこと世間往々にしてこれあり、宗教迫害者が異教徒を殘害するは、之正に迷信を絶ちて、天下正義正信のみを存在せしめんとするの善意に出づ、然れども、その結果は人を迫害するに至る、善意の所行、必ずしも善果なりといふべからざる事かくの如きあると共に、惡意の所業亦惡果ありと云ひがたし、自己の名聞の爲めに施行し、救恤するはその意善なりといふべからずと雖も、而かも結果は、窮迫者を救ふ、敢て眞實にその窮迫を憐んで、救恤するものと、更に異ならざるにわらずや





### ○信徒の使命

從來東洋諸國の民が、個人として特殊の材能を發揮した實例は乏しく無い。又、自國內に組織的の大業を全ふした事實も尠くは無いけれども、之を萬國史の上に發揚し、世界の環視の中に、組織的の大行動を演じた事は、今回の日露戦争を以て、實に嚆矢とするのである。此舉たる吾に在ては唯平生蘊蓄へてゐた事準備してゐた所を、會々事實に現はしたまでに過ないのであるけれども、彼西洋各國の人に在ては、曾て眼中に東洋列國を認めなかつた朦昧を啓發せられ、眞に霹靂一聲碧空に轟く、天の默示を聴くやうな感じがしない理には行かぬかつたので有らう。

是は誠に我國民に取て壯快の事に相違ないけれども、戦役そのものさへも尙半途にある今日、吾輩は未だ容易に頌徳表を受くるの時でないことを知てゐる。況んや戦後經營の大業は我が眼前に横つてゐるに於いてや。吾輩が此際辨へなければならぬのは、天下の大勢である、吾輩の立場である。之に伴ふ責任である。我帝國臣民の中に於て、組織的行動に遺憾のないのは、今日唯軍隊があるばかりである、軍隊以外の凡ての社會に於て鞏固する団体と、之に伴ふ必要なる修養とは、我同胞の尤も缺乏してゐる所である、此際我天理

教信徒諸君が、國運發展の先頭に立て、我同胞に宣傳すべき使命を攻究するのは、尤も燒眉の急務ではあるまいか。

ソコで、今日先づ宣傳すべき最大の使命は、人格の實在である。嘗て個人道徳の根據として、品格の修養を説くに止らないで、進んで宇宙人生の本源より、人格的實在に達し、天地萬有の主宰者であるところの、天理の大神を信するに至らしめなければならぬ。

蓋二十世紀の大標語は組織的の活動である、秩序の無い活動と、意志の無い組織とは、共に無意義である。無意識的の天地は、盲動と破滅とがあるばかり、經綸のある大經營は、健全な人生觀の上にこそ立てられるのである。彼の「入相の鐘に花や散るらん」的の果敢ない浮世の無常」を感ずる噴々たる厭世教の信徒は、とても活劇場裏の大經營に與ることは出来ぬのである。人生の眞實と、永遠の生命とを確信したものであつて、始めて岩の上に築く大厦の設計「かみのやかたのざばさだめ、ふしぎなふしん」に従ふことが出来るのである。而して、人生の眞實は品性の權化に外ならないのである。我に憧憬とこの人の人格の實在を認めることが無つて、何うして人生觀の確立を待つことが出来ようぞ、人生觀の確立が無つて、經營や組織を講ずるのは、それこそ砂の上の家である。天を信するのは自己を信するのである。自己を信するのは事を成すの基である。懷疑論者と無神論者は、これに與かることは出来ない。今日大神を仰いで其至愛を我同胞に證しするのは、とりも直さず國運發展の鎖鑰を與へるやうなものである。

第二の使命は、勞役の福音である。人生の快樂を以て己が名利を貪るにありと爲して、只汲々として自己の

なぐりめぐりな

なぐりめぐりな



功名にのみ眩惑んでゐる徒は、組織的活動「ふしぎなふしん」の名譽を荷ふことは出来ないのである。萬民が各々其分を盡してこそ、國家の大經營「かみのやかたのぢばさだめ」が始めて成功を全ふするのである。高く天空に聳ゆる大厦の維持は其柱營の下に深く藏れたる磐石を要する如く、大組織の活動「ふしぎなふしん」は、多くの現れざる無名の英雄「よきとよりやう」の伏在に待つことがあるのである。献身犠牲「ひのさしん」の美果は容易く收め得らるべきものでない。隠れたるに見、密かなるに知りたまふ大神の御前に度しむ者であつて、始めて欣々然として、勞役には自ら當り、功績は他人に歸さることが得られるのである。「よくをわすれてひのさしん、これがだいいちこへとなる」これが今日の福音である。彼の名利を以て他を誘ひ、自ら收攬の術を得たりとするやうなことは、恰是六字の名號を唱へて、進軍ラッパの譜に和せやうとするやうなものである、たとへ一時胡麻化すを得ても、その調は遂に諧はないことに立至るのは、是非もない次第である。

第三の使命は、進取の福音である。組織的活動「ふしぎなふしん」に生命を與へるものは、進取的精神「はやくふしんにどりかゝれ」である。けれども「なかくこのたびはうれつに、しつかりしあんをせにやならぬ」永遠の發達「いつくまでもつちもちや」を期して苟も撓まぬものでなければ、眞正の進歩を解することは出来ない。人生の眞實を信じ、勞役の神聖を認め、我生涯の大目的を有てゐる者にして、始めて常に進取の行途にあることが出来るのである。由來我國民は進歩を以て名がある。米國の俚諺に「造物主は日本の外、何所でも遅々してゐる」と云ふのがあつたが、併し、根據の無い進歩は進歩ではない、目的の無い進歩は進歩

でない。組織的活動「ふしぎなふしん」の中心たる者は「ふしぎなふしん」をする者れど、たれにたのみはかけんでぞ「我天理教信徒の本色ではあるまいか。第四の使命は、保全の福音である。進取と相伴ふて其過不及を補ふものは「むしやうやたらにせまこむさ、しつかりしあんをせにやならぬ」則ち保全主義に他ならぬのである。投機的僥倖心「よくがあるならやめてくれ、かみのうけとりでけんから」は、事を成す所以ではない、冒險的盲進主義「むりなねがひはしてくれな、ひとすぢごころになりてこい」は、萬全の方針ではない。我輩が世界的眞理「せかいいちれつゝさむさり」の上に立つて「永久不變の大道」いつくまでもつちもちや」を示すのは、今日の責任ではあるまいか、泰西の文明を代表してゐる英國の特色は、其保守的氣質に存してゐる。我國民が動もすれば「むしやうやたらにせまこむ」輕舉速成の弊に陥らふとしてゐるに際し、脚に在ては千年も一日の如くであるといふ、古來の眞理を闡明するのは、信徒の責任である。蓋組織的活動「ふしぎなふしん」は、一日で生れるものではない、必ず順序と規律を履んで、最終の標的に到着すべきである。

國運の發展は至聖者の攝理に存してゐる「みなだんくとせかいから、よりきたことあらでけてくる」の約束を受けてゐる信徒等が、勇み進んで「ひろいせかいをうちまはり、いつせん二せんであすけゆく」同胞啓發の大任に當り、この千古未曾有の大機會に際して、「あしきをはらうてたすけせまこむ」彼等に福音を傳へ、彼等を甘露臺に導くのは、吾輩の本分ではあるまいか、「このたびはがみがあもてへあはれて、なにかいふをどきどきかす」天理教徒の諸氏、立て、説け、叫べ、卿等の同胞も、異邦の民も、天空に書れし默示の文字



を眺めて、「よろづよのせかいにちれつみはらせど、むねのわかりたものはさい」誰も彼もろの解釋に或ひつゝあるではないか。

### ○人を去つて神に就け

或る西洋人が日本の進化を論じた一節に、英國人は子供を叱つて育て、日本人は子供を笑つて育てる、といふ冒頭がして有つた、吾人は之を見て、又例の西洋人が、日本の習慣風俗を確に知りもしさいで、半可通なことを云ふ、如何に日本人が子に甘いからと云つて、笑つてばかり子供を育てる親があるものか、と、心中で冷笑ひながら、尙其先を讀んで見ると、英國人は子供が何か悪いことをすると、嚴しく叱つて毫も假借しない、例へば喫飯の時に子供が専横でもすると、一室の内に閉籠めて、其非を悔いて心から謝びる中は、決して食事をさせない、又、叱つても啼止まない時は、庭へ逐出して、啼止まない中は何うしても上へ上げないといふやうに、非常に教育が嚴重である。日本人は子供が何か悪い事をする時、叱りもするが其他に一の習慣がある、例へば子供が學校へ行くのを嫌がつてだどをこねると、其親は其子に對つて、お前のやうに學校へ行くのを嫌がると、お隣の小父さんが笑ふと、此う云ふ、すると其子供は、親の小言よりも他人の笑ひを畏れて、大人しく學校へ行く、又、例へば子供が熱いからと云つて裸体になり、其親が何と云つて叱つても着物を被さいが、お前のやうに行儀の悪いことをすると、お向ふの小母さんが笑ふといふと、その子供

は、急に着物を被て肌をかくす、英國人の叱るのと、日本人の笑ふのと、同じ子供を教育するのでも、何と變つた習慣ではないか、と、書いて有た、之を讀んで、さすがは西洋人だ、好いところに氣がついた、日本人は笑つて子供を育てるとは、實に皮肉な言ひやうであると、初めの嗤笑は後の感心と成た事がある。

此の笑つて育てるといふことは、羞といふことを知らせるので、人に笑はれないやうにしる、羞といふことを知れば、武士的教育の大本、言を換へて言へば、之が武士道の極意であつて、日本人が体の小いにも拘はらず、力の微さいにもかゝらず、戦争に強い重なる原因は此にあるのである。廿七八年の役に、土地なら三十六倍も大きく、人口なら十層倍も多い支那と戦つて、我軍隊が美事な勝を奏したのも………聖天子の御稜威の然らしむるところであるのと、魯王愛國の心の壯んであつた爲であることは無論であるけれども………一つは毛唐人に笑はれまいといふ耻を知る心が興つて力のあつたので、又、三十三年の北清事變の際にも、他の歐洲諸文明國の兵に較べて、一番倭小い一番見すばらしい日本兵が、天津に、北京に、一番目覺しい働きをしたのは、一つは、當時の師團長たる山口中將が、今度の戦争は列國環視の中で働く、極めて晴の場合であるから、他の兵士に笑はれぬやうにしるべしと云た、一號令に奮發した爲であるといふ事である、今度の日露戦争にも、海に陸に我が日本軍が連戦連捷、相手の露人は素より、各國人の視聽を驚ろかし、心膽を寒からしめつゝあるのも、一つは、土地の大に誇り、人口の多に誇り、戦争の強に誇る露人に笑はれぬやう、歐米各國民に笑はれぬやうといふ、耻を知る心が之を鼓舞作興して此に至らしめたのである。サア此の人に笑はれまいと言ふ氣風、即ち羞を知る心、是は前にも言ふ通り、日本人の特質、否美質で、單



に戦争に強い計り無く、此の氣風、此の心が、社會の制裁にも成て、今日の日本は、物質的の進歩の著大しいのに、精神的の進歩は伴はないで、道徳は腐敗し、風俗は壞類してゐるけれども、尙國民が幾分か身を慎み、行を省みて、飽まで禽獸的の欲望を恣にしちいのである。又、下等の官吏、巡查などが、他の朝鮮、清國、露國、否、或る文明國の夫に比べて、多少清廉潔白の傾きがあり、又、藝妓の賤業を營む者にも亦、往々或は物質は賣れど精神は賣らぬ、降るわめりかに袖はぬらさじの不屈の氣象のあるのも、此の氣風と、此の心が與つて力のあるのである。

けれども此の笑はれまいといふ氣風、即ち羞を知るの心は、人を標準に立て夫から割出したものであるが、人は限りのあるものであるから、其標準に追附くと、否、標準に超へると、言を換へて言へば、もう是で笑はれることは無い、羞かしいことはないといふ位置にまで進むと、安心に陥る憂ひがある、寧ろ驕慢に走する惧がある、其證據は世間に澤山ある、學生の時代、小役人の時代、丁稚の時代、若者の時代には、落第して人に笑はれまいと思つて勉強する、失敗つて人に笑はれまいと思つて勉強する、夫が卒業して學士となる、もう怠惰ける、小役人が出世して大役人に成ると、もう増長する、丁稚が手代に、若者が番頭に成ると、もう放蕩ける、たま／＼學生から博士、小役人から親任官、丁稚から大金満家に成る者があるが、夫等の人もやはり標準を人に執るのであるから、登れば登る程、上れば上る程、乃ち自分に較べる人が少くれば成る程、笑はれる人が少くなれば成る程、羞る心が薄く成て、増長をする、驕奢をする、再横をする、世の所謂大天狗と成て、少壯の時の謙直あるにひさかへて、却て禽獸に近いやうな行爲をする事になる、此點

に就いては豊太閤は實に日本人の特性——長所短所を十分に發現してゐる、彼の半生、乃ち人に笑はれまいと思ふ時代は、極めて謙勉質實の人で、後の半生乃ち笑ふ人のやうに成た時代は、極めて驕奢放逸の人である、藤吉郎筑前守時代と、太政大臣關白殿下の時代とは、殆んど別人のやうである、是は全く限りのある人を標準に立て、夫に因て物をする長所、乃ち短所である、美質、乃ち悪質であると言はなければならぬ。此點から觀察すると、前にも云ふ通り、二十七八年の戦役には、清國人に笑はれまいと思つて氣張り、三年の事件には、各國の軍隊に笑はれまいと思つて働き、今度の日露戦争には、露國人に笑はれまいと思つて戦ふ、此羞を知るの精神氣力に因て、十二分の勝を得ることは無論であるが、勝を得た後の日本國民は何うで有るか、

世界第一の強國を以て許され、英米獨佛の強國さへも恐怖の念を抱いてゐる位の露國と戦争して勝つたら、もう此上に怖いものはない、笑はれることはない、サア、此う成た時の日本國民に、増長の念は生じまいか、驕奢の心は動くまいか、若も増長の念を生じ、驕奢の心が動くならば、個人として發達が止まるやうに、國としても進歩が休むのである、發達が止まり進歩が休めば、其人其國は退歩するのである衰亡するのである、何と恐る可きではないか。

英國へ行つた友人の語に、龍動の市街を逍遙いて見ると、質素な服を着し、古い禮帽を冠り、重い丈夫な靴を穿いて、石の敷いてある往來を、肩を弾かしてゴック／＼と歩いてゐる人がある、是は中等以上の人で乃ち英國の紳士であると云ふことを聞いてゐるが、是は如何なる現象で有う、彼等英國國民は世界の七分を其領地



とし、富に於ても、強に於ても、世界第一を以て稱せられてゐる文明國でありながら、其國民の多くは此の  
 話の通り、誇らず、驕らず、今尚勤勉で質實で、我々汲々として各々其業に勵んで活動してゐる、而して、  
 其國は倍々富み、愈々強い、是は何故で有るか、彼等英國國民は、力に限りのある人間を標準にして、他に笑  
 はれまい笑はれては羞だと思つて、夫が爲に戦ひ、夫が爲に働いてゐるのではない、絶体無限の力のあるゴ  
 ットを信じ、夫を標準にして、ゴットに罪されまい、ゴットに愛されやうと思つて、戦ひもし、働きもして  
 ゐるのであるから、何程戦に勝ても、何程事を成しても、誇ることが無い、驕ることが無い、誇らぬから、  
 驕らないから、發達する、進歩する、其國は倍々富み愈々強くなるのみである。  
 ソコで我日本國民も今度の戦争に勝つと同時に、四千餘萬の同胞が皆協同して、有限の力を有てゐる、人を  
 標準にする事を止めて、無限の力を具へてゐる神を標準にする事にしなければならぬ、無限の力を具へてゐ  
 る神を仰いで向上すれば、自然の力の足らぬことを知るから、戦に勝つても、事を成しても、誇る心は出  
 ぬ、驕る念は生ぜぬ、誇つたり驕つたりしければ、其國は倍々發達し愈々進歩して、富み且つ強くなるの  
 は當然で、神の榮ゆる如く永遠に榮ゆる道理である。  
 嗚呼我天理教は、教祖が「このたびはかみがおもてへあらはれてなにかいさいをどきどきかす」と道破され、  
 天神地祇の靈徳妙用を統稱して天理大神と崇められ、人は皆此大神の恩顧に依る可き事を教へられたのであ  
 る、我が四千餘萬の同胞にして、未だ此大神の恩顧に依らざるものは、此日露戦争を期として、一日も早く  
 此大神の恩顧に依り、絶体無限の力を仰ぎ、誇ることもなく、驕ること無き、敬虔謙遜の人と成て、人の笑ひ

と羞る如き狹隘低卑なる觀念を去て、其眩ざる所に戒慎みて神明の照鑑を畏れ、幽冥の洞觀を耻ぢ、常に向  
 上して發展して、真正に偉大の國民となり、夫婦揃ふて日の寄進的に勤勉活動爲し、我國をして文明富強の  
 絶頂に達らしめ、ゴットを信するを以て誇りとしてゐる英國國民をして、後に陸若せしめなければならぬ、又  
 教祖の教に、日本は神國で、あらゆる國の根本であるから、小さいやうで大きい、弱いやうで強い、である  
 から、日本の眞價實力が現はれる日には、世界は畏怖して尊敬すると仰せられたことがあるが、夫は全く今  
 日あることを豫言されたのである、其神國の神民として、天理大神の恩顧に依らない者は、自ら神國民たる  
 の資格を放棄つ者と云はねばならぬ、我が四千萬の同胞よ、速に人を去て神に就け。

### ○如何したら眞理を知ることが出来るか

なんでもこれからひさすうちにかみにもたれてゆきます(御神樂歌三下り目第七節)

爰に眞理といふのは、勿論宗教上の眞理であります。宗教上の眞理は如何して知ることが出来るか、是が私  
 のお話しをまをさうとする主意であります。  
 知るといふことは、すでに智識的の言語で、宗教上の眞理も先づ第一に智力に依らなければならぬと云ふこ  
 とは明らかであります。併し、宗教は智力のみで知られるものではありません。何故といふに、宗教は科學  
 ではありません。若も宗教が科學であるならば、勿論智力のみで知られることも出来ませう、けれども宗教  
 には所謂精神的要素(たましいのどだい)といふものがあります。是等のものは唯智力に依てのみ得られるも



のでありません。若も唯之を智力に依てのみ知り得たならば、是は科學的智識で、未だ宗教の範圍に至らぬのであります。故に宗教に必要な生命といふものは、其中にないのであります。魯國の大宗家のトルストイ伯は、曾て「宗教の事を説くに言辭を以てするは不當あり、宜しく涙を以てすべし、若此涙なくば宗教の事を説する勿れ」とまをしました。涙とは即ち感情であります。宗教を解するに、冷やかさ智力のみではいけない、暖かな涙があくなくてはなりません。眞理を聞いて之に感激し、泣いて其罪を悔ひ、怒つて其不義に敵し、勇みて其義を行ふの概があくては、とても宗教の眞味、眞相は解せられるものではなりません。故に宗教上の眞理を知らふと思ふならば、此涙がある、此暖かなる感情を養ふの必要があるのであります。けれども唯感情ばかりでは誠に弱いものであります。泣いて罪を悔いても亦忽ちにして罪を犯すことがあります。怒つて不義を悪んでも亦忽ちにして其不義に與することがあります。勇みて義を行はんとしても其決心は何時の間にか消散してしまふのであります。宗教が單に感情に止まつてゐる間は、是は唯電光石火の間のみで、決して永續するものではなりません。従つて宗教上の眞理に達する際にはまゝあらずいのであります。

是に於てか眞理を知る大要素あるものが必要であります、夫は何かと云ふと、意思であります。眞理を守り、眞理に従はふとする、強固ある、善良なる意志であります。勿論智力と感情の大切であることは、忘れてはならぬのであります。智力も感情も、此眞理を守り、眞理に従はんとする、善良の意志でありませぬでは、宗教を了解する力となるものではありません。故に御神樂歌の中には、往々意思の大切なことを教へられてあります「さんざいこころをさだめよ」、「うつれもつさくるならば」、「ひとすぢこころになりてこそ」、「かみにもたれてゆきませす」、「かみがみてるまをしつめ」ふたりのこころをおさめよ」、「ひねのうらよりしめんせよ」、「ふからこころがあるあらば」、「よくこころをさだめかけ」、「かみのこころにもたれつげ」、「しめんざだめてつらこころ」、「こころざだめのつくまは」など枚擧ぐるに遑のき程あります、此のやうに「さんざいこころ」、「ひとすぢこころ」、「しめん」、「ひねのうら」と各種に仰せられてあります、つまり意思の大切

さを教へられたので、心をさだめ、胸を定め、思索を定めて、神に従ふ、是が即ち、眞理に従ひ、眞理を守らふとする、強固な、善良な意思を以て、始めて眞理が了解されるのであります。故に眞理を學ばふと思ふならば、第一に必要なものは、分拆的批評的の智識でもなく、又極めて激しい感情でもなく、強固な、善良な意思、即ち教祖を遺はしたまへる神様の御旨に従はふといふ、強い願ひ、善い心（さんざいこころ）、ひとすぢこころ）であります。此願ひ此心があつて、其分拆的批評的の智力も、感激し易い感情も、初めて用をなすのであります。先づ第一に意思は智力に大なる影響を及ぼすものであります、意思の強固な人は、眞理を了解する智力があります、薄志弱行の人には此智力が乏しい。強固な意思のない、善良の意思のない人は、自然の智力も鈍りますから、到底眞理を了解することが出来ないのであります。之に反して堅固な善良な意思をもつてゐる者は、元より世の毀譽褒貶を恐れないで、あくまでも眞理を眞理とし、誤謬を誤謬として憚らないのでありますから、其智力も純粹で、銳利で、遂に眞理を發見するのであります。然れば眞に眞理を學ばんと思ふ



ならば、先づ願みて、自己は果して眞理に従ひ、眞理を守らんとする、堅固な、善良な意思を有てゐるかど、自ら問ひ自ら答へた上で決しなければなりません。然うで無くつて唯一時の風潮に従ひ、時好を逐ひ、徒に批評的、分解的、比較的的研究などをしたからと云つて、宗教上の眞理は決して了解されるものではありません。教祖が「よくがあるならやめてくれ、かみのうけどりでけんから」、又「むりにでよふとゆうであら、こころさだめのつくまでは」と仰せられたのは、此理を説かれたのであります。夫から宗教上の眞理は、之を信じて實行するに由て、始めて了解されるものであります。凡て何事でも私共に信ずるといふことがなければなりません。凡ての眞理は先づ信ずるに由て了解されるのであります。例へばニュートンが引力の理法を明らかにいたしましたのが、私共は之を信じます。之を信じて日月星辰の天に懸る所以、潮汐の満干ある所以、物の地に落ちる所以を了解するのであります。又私共は進化説を信じますが、必ずしも一々その理を研究して、而して後に信じるのではありません。マルウイン、ワイスマン等の、科學的天才を信ずるより、之を信ずるのであります。宗教道徳の問題に至つても、亦同じことであります。一々自ら批評して、研究しなければ、信ずることが出来ないといふならば、とても眞理は了解されるものでありませぬ、故に私共は先づ宗教的天才即ち教祖を信じ、其教ゆるところを信じてゐるのであります。信じて而して之を實行するのであります。凡る眞理は實驗に由てます。明らかになるものであります。殊に宗教上の眞理は實驗でなければ其眞味、其眞相を了解し得るものではありません、宗教上の眞理は所謂活ける眞理であります。故に生きて私共の實驗とならなければ、未だ眞理を知らぬものではありませぬ、故に眞理を知らぬと思ふならば、先づその信ずる所の眞理を實行するのであります。そのもつてゐる光明を用ひて、之に由て歩むのであります。「ふうふそろふてひのさしんこれがいちものだねや」と教祖の教へられたのは、此理を示されたので、既に知る所の眞理に忠にして、之を實行することを勤めぬならば、他の眞理は決して與へられるものでありません。教祖が「むごいこころをうちわすれやしきこころになりてこら」と仰せられたのは、即ち明白なる眞理を受くる精神のないものは、更に進んで眞理を受くる権利のないことを示されたのであります。世の宗教を學ばんとする者の中には、宗教上様々の問題を提出して、悉く是等の事が解つたなら、初めて信仰の道に従ふといふ者があります。此様な人は此世の中に行はれてゐる、自然の法則さへも知らないものであります。A、B、Cを學ばない前に、カライルヤ、シエクスピーアは決して了解することは出来ません。先づ線や圓形や光線の工合を學ばなければ、肖像を畫く譯にはまゐりません。音楽を學ぶのでも、彫刻を學ぶのでも、先づ單純平易なところから始めて、其單純平易なところが眞に能く出来るやうになつて、初めて複雑高尚な點に移るのであります。故に眞に英語を學ばんとする者は、先づABCから初め、眞に繪畫を學ばんとする者は、先づ線や圓形を畫くことから學んでまゐります。宗教の事に至つても亦これと同じことであります。眞に眞理を知らぬと欲ふならば、先づ平易簡明なる眞理から初めて、其知れるところを實行すべき筈であります。然るに古來の哲學者も神學者も了解に苦むやうな大問題を捕へて、之が了解せられたならば、我も亦宗教を信じると云つて、頻りに是等の大問題を研究してゐる者があつたが、而して彼等は平易簡明なる眞理を實行することを勉めない。目前つくすべし義務をつくさな

ならず、先づ願みて、自己は果して眞理に従ひ、眞理を守らんとする、堅固な、善良な意思を有てゐるかど、自ら問ひ自ら答へた上で決しなければなりません。然うで無くつて唯一時の風潮に従ひ、時好を逐ひ、徒に批評的、分解的、比較的の研究などをしたからと云つて、宗教上の眞理は決して了解されるものではありません。教祖が「よくがあるならやめてくれ、かみのうけどりでけんから」、又「むりにでよふとゆうであら、こころさだめのつくまでは」と仰せられたのは、此理を説かれたのであります。夫から宗教上の眞理は、之を信じて實行するに由て、始めて了解されるものであります。凡て何事でも私共に信ずるといふことがなければなりません。凡ての眞理は先づ信ずるに由て了解されるのであります。例へばニュートンが引力の理法を明らかにいたしましたのが、私共は之を信じます。之を信じて日月星辰の天に懸る所以、潮汐の満干ある所以、物の地に落ちる所以を了解するのであります。又私共は進化説を信じますが、必ずしも一々その理を研究して、而して後に信じるのではありません。マルウイン、ワイスマン等の、科學的天才を信ずるより、之を信ずるのであります。宗教道徳の問題に至つても、亦同じことであります。一々自ら批評して、研究しなければ、信ずることが出来ないといふならば、とても眞理は了解されるものでありませぬ、故に私共は先づ宗教的天才即ち教祖を信じ、其教ゆるところを信じてゐるのであります。信じて而して之を實行するのであります。凡る眞理は實驗に由てます。明らかになるものであります。殊に宗教上の眞理は實驗でなければ其眞味、其眞相を了解し得るものではありません、宗教上の眞理は所謂活ける眞理であります。故に生きて私共の實驗とならなければ、未だ眞理を知らぬものではありませぬ、故に眞理を知らぬと思ふならば、先づその信ずる所の眞理を實行するのであります。そのもつてゐる光明を用ひて、之に由て歩むのであります。「ふうふそろふてひのさしんこれがいちものだねや」と教祖の教へられたのは、此理を示されたので、既に知る所の眞理に忠にして、之を實行することを勤めぬならば、他の眞理は決して與へられるものでありません。教祖が「むごいこころをうちわすれやしきこころになりてこら」と仰せられたのは、即ち明白なる眞理を受くる精神のないものは、更に進んで眞理を受くる権利のないことを示されたのであります。世の宗教を學ばんとする者の中には、宗教上様々の問題を提出して、悉く是等の事が解つたなら、初めて信仰の道に従ふといふ者があります。此様な人は此世の中に行はれてゐる、自然の法則さへも知らないものであります。A、B、Cを學ばない前に、カライルヤ、シエクスピーアは決して了解することは出来ません。先づ線や圓形や光線の工合を學ばなければ、肖像を畫く譯にはまゐりません。音楽を學ぶのでも、彫刻を學ぶのでも、先づ單純平易なところから始めて、其單純平易なところが眞に能く出来るやうになつて、初めて複雑高尚な點に移るのであります。故に眞に英語を學ばんとする者は、先づABCから初め、眞に繪畫を學ばんとする者は、先づ線や圓形を畫くことから學んでまゐります。宗教の事に至つても亦これと同じことであります。眞に眞理を知らぬと欲ふならば、先づ平易簡明なる眞理から初めて、其知れるところを實行すべき筈であります。然るに古來の哲學者も神學者も了解に苦むやうな大問題を捕へて、之が了解せられたならば、我も亦宗教を信じると云つて、頻りに是等の大問題を研究してゐる者があつたが、而して彼等は平易簡明なる眞理を實行することを勉めない。目前つくすべし義務をつくさな



のであります。此様な人に向つては、教祖が「やさしきことゝるにありてこゝ」と仰せられた如く、決して眞理を知る光明は與へられぬのであります。平易なる眞理を行ふて、然る上に、高上なる眞理の光明が来るのであります。

夫から夫の愛情であるとか、又は親切であるとかいふことは、宗教上最も大切なことであります。是等の高上なる情を養ふことも、亦強固な意思を以て實行するに依るのであります。勿論愛情や親切といふものは意思に由て生ずるものではなりません。けれども其初めは愛情からやるのではなくとも、厭々之を實行すれば、一方に愛情に反對する憎悪の念が自然薄くなつてまゐります。私共に愛情が足らぬ、親切心が乏しいといふのは、畢竟嫉妬心や、憎悪の念(にくい、うらみ、はらだち)が強いからであります。私共が教祖の教誡を實行いたしますならば、私共の愛情の生長を妨げてゐる、悪い心があくなつて、自然愛情が此に生ずる餘地が出て来るのであります。例之夫の瘠地は、ひとり穀物を生ずることが出来ないのみならず、雑草をも生ずる力がないのであります。併し、人の心は瘠地ではありません、寧ろ耕作をしない豊饒の土地の如きもので、耕作をせぬから、欲念(はししい)憎悪(にくい)嫉妬(うらみ)などの雑草が繁茂して居るのであります。私共に愛情や親切の心が乏しいのは、畢竟此等の雑草が繁茂してゐるからで、若も私共が強固な意思を以て、狂げても人を愛することを實行して止まなかつたならば、何時の間にか是等の雑草は根絶しにされて、爰に愛情の植附けられる餘地が出て来るのであります。故に暖かな濃かな情を養ふといふことも、亦、強固な意思がなくては出来ぬのであります。「やさしきかみのでんぢ、まいたるたねはみなはへる、しつかりたねをま

くべし」と教祖の教へられたのは、此理を示されたのであります。

故に眞理を知らふと欲ふならば、先づ善良にして強固ある意思を要するので、批評的、分析的の智力や、激し易い感情よりも、先づ此意思を携へておいでなされ、然らすれば眞理は諸君のものとなるのであります。

### ○教育と宗教

一 記者

今度記者は不肖の身を以て、教師講習會の講師の一員に撰まれ、詔勅録の講習を擔任いたしましたして、教育勅語の講習を任りましたが、此勅語は國民教育の基礎を立て淵源を示され、國民として拳々服膺しなければならぬ、世にも難有いものであることは、常から心得ておりましたけれども、サテ、改めて之を講習いたして見ますると、復難有さが格別で、之が爲めに種々感が起りましたが、其中の一を左にお話いたします。此勅語の主意を摘要んで申しますれば、孝悌忠信の徳行を修めて、國家の基礎を固くし、共同愛國の義心を培養して、不虞の變に備へるといふのにあるやうに窺はれますが、併し、辭は簡でありますが義は多く、其中に、修身、齊家、治國、平天下の道德倫理が、總て籠つておりますから、之を教育の基礎とし淵源として教育された國民には、其他に宗教を以て感化するの必要があるだらうかと云ふ疑問が起つてまゐりますが、記者は、宗教の必要は無論あると斷定いたします。成程勅語の主意に基いて教育された國民は、忠良の臣民たるに相違ありません、而して、國民としては忠良の臣民とされれば、其資格を全ふするものでありますけれども、併し、人間としては又其他にも尙或る資格を要するので、其資格を作るには又他の感化を假らなければ



ばなりません、其感化は宗教より受くるのであります。只是丈申しただけでは物足りませんから、今少し詳しく述べることにいたします。教育の教へまする道徳は普遍的でありまして、夫に依て、孝悌忠信の徳行を修め、共同愛國の義心を養つて、忠貞の臣民とあることが出来ず、宗教の教へまする道徳は超絶的でありまして、夫に因て、孝悌忠信共同愛國といふやうな、表面現象に止まりませんで、尙一層深遠な徳行を修養することを得て、高尚な人間となることが出来ず、言を換へて申しますれば、教育は人をして人たらしむるもの、即ち人道の正義を辨へて、知足安分俯仰天地に愧ることなく、生涯を安樂に送ることを得ざるもの、宗教は人をして神たらしむるもの、即ち天理の玄妙に参し、靈魂不死の理を窮め、安心立命望を未來に繋ることを得ざるものであります、約めて言へば教育は形而下のもので、人に謹慎の心を有せ、其感化は現世に止まり、宗教は形而上のもので、人に慰安の念を有せ、其感化は未來に及ぶのであります、夫故に、人間には教育の必要なる如く、宗教も亦必要でありまして、車の両輪と同じく、孰も一方を欠くことは出来ません、が、殊に宗教心といふものは人間が先天的に有て生れたものであります」

此う申しますると、其次に起ります問題は、それならば如何いふ宗教が日本國民に適當なものであるかといふ、宗教の選擇であります、日本國民に適當な宗教と言へば申すまでも無く、孝悌忠信共同愛國の徳義の修養に裨益ある、國体の精華に適ひ、勅語の聖旨を奉ずるもので無ればなりません、其様な宗教は果して孰れでありませうか。

佛教は吾邦へ渡つてから、既に千有餘年の長き月日を経て、上は貴顯紳士より下は庶民に至るまで、之を信奉するもの數千萬を以て數へる程でありまして、或點から申しますれば、日本は佛教國と云つても差支へないのでありますから、之が適當な宗教でありませうか、否々、佛教は長く吾邦に行はれ、信者も數多くあります、基礎が厭世教でありまして、此世を濁世と觀し、未來を極樂と信じ、所謂厭離穢土、仰光淨土を以て宗旨とするもの、日本に渡來いたしましたから、行基、傳教、弘法と諸名僧の工夫に依りまして、成生化育向上進化、現世主義樂天的なる吾邦の國体人心に適ふやう習合いたしました、神道的現世教に燒直しました、維新以來神佛混交の陋習を除却されましたのと同時に、本來の厭世教にも復れず、又習合した現世教にも居られず、中に瓢平のどつち着かず、半死半生の状態に陥つておりますから、忠君愛國向上進化を以て國体の精華人心の本分といたしてあります、現世主義樂天觀の日本國民には、甚だ不適當な宗教であります。夫ならば耶蘇教は何うで有るか、耶蘇教は愛を以て根本といたし、生々化育、向上進化的の宗教であつて、歐米各國の文明の基礎と成たものであるから、現世主義樂天觀の吾國民に適當であるやうであります、耶蘇教は獨一の眞神を父といたし、あらゆる人類をその子といたし、則ち人は神の子であるから、君に背き親に違ふても、神に従はねばならぬと、神に對して絶對的の服従を教へる否強ひる宗教でありますから、萬世一系の君主を頂き、君民の間に格別の關係を有てあり、忠孝を以て生命とする吾日本國の人民、否、吾日本國體には、最も不適當な宗教であります。

夫ならば儒教は何うで有るか、儒教は佛教よりも古く吾邦に行はれてあり、仁義忠孝を以て本義としてあり



吾邦の風教倫理にも多大の感化を及ぼしてゐるから、孝悌忠信共同愛國の教育の主義に適當なやうであります。儒教は堯舜以來神聖といふことを美德としてゐる國体から生立つた道でありますから、吾日本の臣民が開闢以來一系の天子に事へ奉り、克く忠に、克く孝に、億兆心を一にして世々厥の美を濟せる國体から生立つた道とは、根本的に主義を異にしてゐります。夫故に、その忠と云ひ孝と云ひますも、吾邦の所謂忠孝とは、文字は同じでも意味は非常に違つてゐります。儒教の忠孝には、夏、殷、周、漢、代々君を異にし、君臣の間も自ら疎遠でありますから、臣としては忠を致さなければならぬ、子としては孝を盡さなければならぬと云つて、夫を強ひる意味が籠つてゐり、吾邦の忠孝には、君臣と分れてゐても同じ皇祖より出、同じ皇宗を頂いてゐる國民でありますから、誰強ひ誰教へねども、克く忠に克く孝に世々厥の美を濟すところの、自らなる意味が含まれてゐります。此點から申しますと、人造的の儒教の忠孝が傳來してから、却て惟神の吾邦の忠孝に變化を來して、風教倫理に害を及ぼしたと言はなければならず、又、儒教は、明らかに神の存在を認めず、靈魂の不滅を信じませんので、宗教の体を備へてゐりませんから、旁以て吾國民の信奉する宗教として、單に不適當なばかりでなく、其資格も缺けてゐると言はねばなりません。

夫ならば神道は何うで有りませうか、神道は則ち惟神の大道でありますして、言を換へて申しますれば、日本固有の一大宗教であります。吾邦は所謂言擧げせぬ習慣でありますから、敬神だの、尊皇だの、愛國だの、乃至忠信孝悌だの、仁義禮智だのと云つて、具体的に教へては有りませんが、夫等の事は皆、不言不語神道の中に籠つてゐるのでありますから、是ならば、吾日本國民の宗教として否やのある可き筈は無く、否、日本國民は開闢以來知らず識らずの間に、之を信じ之を奉じ來つたのでありますから、是こそ適當であるやうであります。併し、神道は如何にも惟神の大道で、國民の美德も、國体の精華もこれから、生立つたものは違ひありませんが、神の立られたまゝでありますから、神人同化の理、靈魂不滅の妙を、的確に教へられてありません。夫故に尙宗教の理と体を備へてゐりませんから、之を以て直ちに國民の宗教とすることは如何であります。

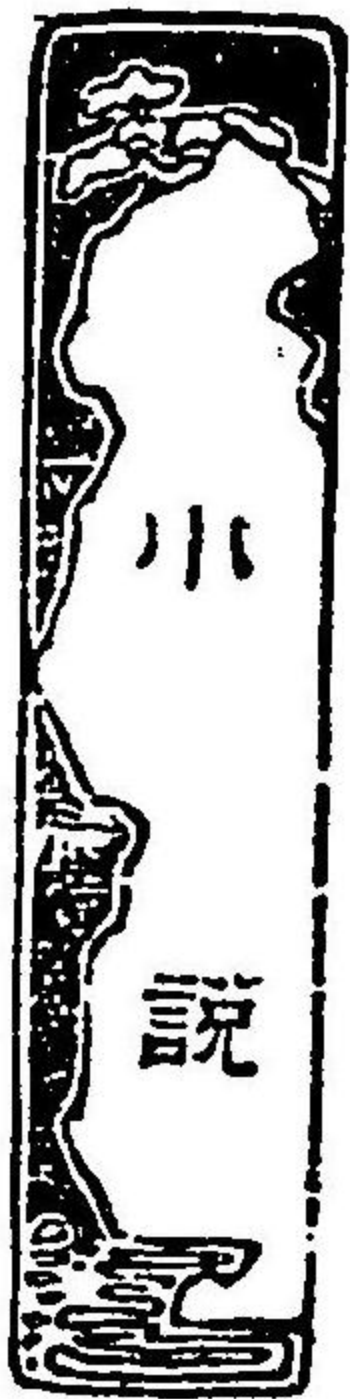
そこで佛敎も、耶蘇敎も、儒敎も吾國体民心に適當らない、神道は結構であるが、尙宗教の理と体を具へ無いとすると、今度はそれならば、如何いふ宗教が吾國体と民心とに適當する宗教であるかといふ問題が起るのであります。記者は少しの躊躇も無く、夫こそ我天理敎でありますと答へます。夫は何故かと申しますと、吾天理敎は、吾邦固有の宗教、神道——惟神の大道から出たもので、克く忠に、克く孝なる國民の美德と國体の精華とを基礎淵源といたしたものであります。夫をば宗教的天才を具へられた、吾敎祖が否、神の勅命を蒙られた敎祖が、天啓の妙理に依て、彼の釋迦が波羅門敎より出て宗教を興し、基督が猶太敎より出て、耶蘇敎を興した、夫等の事蹟より尙一層巧妙なる能力を以て、開始せられたもので、則ち吾邦を造り、斯民を生み、神道を興したまひし、十柱の大神を總稱して、天理の大神と崇め奉り、則ち惟神の大道を宗教化して、多神敎にして一神敎なる甚深微妙の敎理を立られ、敎祖夫自身が人より昇つて神と同化して、神人合一の眞理を明に示し、而して、他の國民も亦修徳被除の法に因て、神魂歸善の域に達することを得せしめ、言を換へて申せば、神の救拯に依て、人を善人たらしめ、否、眞の日本人たらしめて、

皇帝陛下に仕



へて忠義の國民たると同時に、天理の大神に事へて善良の信徒たることを得せしむる宗教でありませすから、孝悌信 共同愛國の徳義を教へられる國民教育と表裏して、吾日本國民を感化するものは、吾天理教の他には無いのでありませす。

而して吾天理教は常に日本國民を感化して善良ならしむるばかりで無く、將來は吾が 皇室の稜威と共に、吾 皇祖の御開きに成た朝鮮、滿洲を始め、支那、印度の亞細亞の人民を善化して、佛敎、耶敎と併立して、世界の三大宗教と仰がれ、更に又、佛耶の兩敎をも制服して、歐米の人民をも善化し、即ち世界の宗教をしてあらゆる人類を善化する時のある事は、記者は信じて疑はないのであります、此様な靈のある力のある宗教を宣傳する教師達は、其責任も亦非常に重いのでありますから、直接には敎典に因り、敎祖の敎を奉じて、入埃の祓除を怠らず、間接には勅語を服膺し、忠信孝悌の道を行つて、實踐躬行、濟世救人の職を全ふしなければなりません、爰に敎育勅語の講習に就ての所感の一つを陳て、之を本號の講話欄内に掲げて、聊か以て敎師諸君の御參考に備へませす。



愛の化身

幽月女史

(上)

幾萬の犠牲が流せる血潮は、旅順陥落てふ祝盃に盛られて、滿都の人は殆んど、狂せる如き千鳥足、右に左に往き來ふ中に、

『ねね旦那、序にあの指輪も買つて下さいな、ねえ、旦那つてば』

『お前は見る物を何でも欲しがらんじやナ、暮の三井の柳だつて三百圓からもある上、今も金時計を買つて遣つたじやないか』

『でも、今日は旅順陥落の目出度いお祝ひ日じやありませんか』

『チヨツ、仕方が無いなア、買はないと言へば、亦直ぐに逆鱗ましますじやらうし、イヤハヤ困つた姫様じやないか』

『ジャ仕方が無い、引返さふ』

淡き宵月の影を浴びて、よれつ纏れつ、今來た心齋橋筋へと引返す、四十路あまりの髯ムジャ紳士と、まだ漸う廿歳ばかりの仇姿

(中)

『姉さん、彼んな人もゐるのね』

十歳あまりの、手織洗晒しの綿入裾短かな小女は、今しも引返し行く兩人の姿を幾度か振り返り見るのでし



だが、やがて羨ましがな聲低く、悄然と星影笑める空を仰いで、油氣なき束髪たばつの亂れ毛を、二すじ三すじ噛み占めつゝ、双子の裕あはせの袖寒そでさむげに、片手に風呂敷ふろしきを抱かかり、片手に妹の手を引きつゝ、耳立みみだつ標めだきの、齒はのゆるんだ日和下駄ひよりげたがも重おもげに、たどくと歩あみを運はこぶ十八九じゅうはちやうの、磨みがかば玉たまの光ひかりを放はなたん面おもざしの、いたくも寝ねれた姉あねを振り仰あいで言いふのでした。

「ア、……………」

姉あねの口くちからは我われ知らず、微ちかな溜息ためいき交まりの返事へんじが洩もれるのでしたが、やがて可憐かわいらしげにしみくと妹いもの顔かほを見下みおして、

「花はなちゃん、許ゆるしてお呉くれれ……、せめて母様おあまさまでもおわるくおかつたら、下駄げたの一足いっさくや簪かんざしの一本位いっぽんばい……姉あねさんだつて買かつたげたいのは山々なまくだわね……けれども……けれども……」

暫時しばらく言葉は途絶とたえるのでしたが、

「明日あすのね米代こめだいさへ……ア、花はなちゃんや夫おれも是これもみんな姉あねさんに意氣地いきちが無いから……許ゆるしてお呉くれれ、ね、人は皆みな、お祝いわひなんて騒さわいで居ゐるのに……ア、花はなちゃん……」

血ちの如ごとく涙なみだの露つゆはハテくと二三滴二三た、抱いだいた風呂敷ふろしき包かみにふりかゝる。

「アラ姉あねさん、妾あたい何なににも欲ほしかわ無なくつてよ、喜きいちやんのやうな着物きものも、お仙せんさんのやうな簪かんざしも、妾あたいちつとも欲ほしかア、無ないワ、夫おれよかね、姉あねさん、妾あたい母様おあまさまにアの、お好すきな魚いしでも買かつて上げたいの」

「オ、花はなちゃん、よ、好よくお言いひだ、夫おれでこそ……母様おあまさまも、と、どんなに……姉あねさんも……」

折柄おりがら幸さいひ人ひと通り稀まれなりとは言いへ、往來かうらいの真中まんなかある事ことをも打忘うちわすれて、姉あねは我われにもあらず、優やさしき妹いもをヒタと抱かかり占しめ、其柔そのやはらかさ頬ほに、撚ねゆるが如ごとく接吻まぐすするのでした。

咄嗟とつさ、不意ふいに、大いきな暖あたたかい手が、輕かろく姉あねの背せにかけられるのでしたが、夫おれと同時に、アツと思おもはず叫なきんで、振仰ふりあぐるの顔かほを見下みおして言葉優やさしく。

「オ、感心かんじんさ娘達こなたちじや、伯父おぢさんが何なにでも買かつて上げるから、サ是これから一所いよにお出いで……」  
莞爾わんじやうに突立つきたて居ゐるのは、五十路いそぢあまりの見みるから福々ふくふくしい一人ひとりの紳士しんし。

(下)

縁ゆかりも因緒ゆかりも無ないお方に、物ものを戴いたく道理だうりがムいませぬと、強しやうて言いひ張はる姉妹あねいもを、無理矢理むりやうりに引立ひきたてた紳士しんし。

「余われは決して怪あやしいもんじや無ないから、安心あんじんして、欲ほしいものを言いひなさい」

言いふ言葉ことばにも態度たいどにも、眞情まじゆうは溢あふるばかり見ゆるので、暫時しばらく躊躇ちゆうちゆうして居ゐた姉あねはやがて思おもひ切きつたやうに。

「夫おれではお言葉ことばに甘あまへまして……何なにんなものでも宜あしうムいますか」

「オ、何なにでも好このみ次第しだい」

聞きくより紳士しんしに先まだつて、呆あるゝ妹いもの手てを引ひき足あしを早はやめた姉あねは、やがて紳士しんしを振返ふりかへつて、嫣然びつくり一笑いっせうしたまゝ、突つと電燈でんとう輝かく玉寶堂たまほうどうへと這入はいり。

「金剛石たいがの一番ばん上等じやうとうの指輪ゆびわを見せて下さい」

姉妹あねいもの風采ふうさいを見て、憐あはれ狂女けうぢよよと顔見合おもひあせさせた店員てんいんは、稍意外せうがいの面持おもてしつゝも、後あとより悠然いゆうぜんと入いり來くる紳士しんしを



見て二度びつくり。

『ヤ、是はく、住の池の旦那様』  
と遽に上を下への大騒ぎ。

此時姉が柳の眉はビクリと動いて、紳士を一瞥したのでしたが、直ぐと亦以前の平穩に歸るのでした。妹は只、呆れに呆れて姉の蔭に小さく成つて居るのです。

『何か其娘の欲しがるものを出して呉』  
と、紳士は臆もての命令。

『ハイ、ハイ』

とばかり、やがて金剛石入の指輪は數々姉の前に並べられるのでしたが、彼女は其中の尤も優れて大さう、ろして尤も細工の好いのを一つ取上げて、

『是は如何程？』

『ハイ、夫は、アノ千圓で』

紳士の顔色はやく動きました。

此時姉は容姿を正して、

『旦那様、夫では何うか之を……』

『宜し』

一諾千金より重し返事。

『有難う御座います……就さしましては旦那様、何うか之を、代金で頂戴致したいのであります』  
『エ、現金で……』

『ハイ……』

紳士は勿論、店員一同狐にでもつまられたやうに、呆然と暫時は、開いた口が塞がりませんでした。

其翌朝より、某町の尤も貧しき十軒の路次長屋には、昨日迄の喧嘩、口論、泣聲等が全く絶えて、其代りに嬉々たる笑聲が充ち満ち、ろして或は菓子やを、或は八百やを、或は天プラやを、或は何、或は何、と思ひくの小商賣を始めたのでしたが、其中の一軒、姉娘が賃仕事して漸う糊口をしのいで居た母子の三人暮しだけは、何故か其敷に洩れて、ろして何れへか其影を隠したのでした。

数日の後、長屋共同で設けた小さき白木の神棚の中には、姉娘が置忘れて往つたのか但は故意に遺して置いたのか、其家の形ばかりの床の間に、委正しく置いてあつた、其装釘に毫の粧飾も無い、御神樂歌一卷を、ろやくしく祭つて、其日から皆が集つて『おしきをはらふてたすけたまへ』と聲も陽氣に、神樂勤めが始められた。





文苑

げんげ

○ 深き森の外田にげんげ咲きにけり

○ 草の戸に干せし蕨とげんげかな

○ 君此頃げんげの花をやみにけり

○ げんげ田や汚なき衣の農夫我れ

○ 野鼠の雨に鳴く音や花げんげ

○ 尼寺やげんげんの咲く松の下

つみくして白きげんげん交りけり

○ 弟や妹やげんげ摘みてさし

○ げんげ咲きて子の虫封じ踏うでけり

○ げんげ摘みて花びらを吹く女哉

○ 捨石に人憩ふ野のげんげかな

○ 附け芝の濃やかなるげんげかき

○ うなぬ子の花輪になせしげんげ哉

○ げんげ田を鋤く霧雨となりけり

○ 乳母車げんげ野さして行きにけり

明治三十八年六月六日印刷  
全年月十日發行

發行者

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八十番地

増野正兵衛

編輯者

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八十番地

篠森乘人

印刷者

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

濱田正夫

發行所

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八十番地

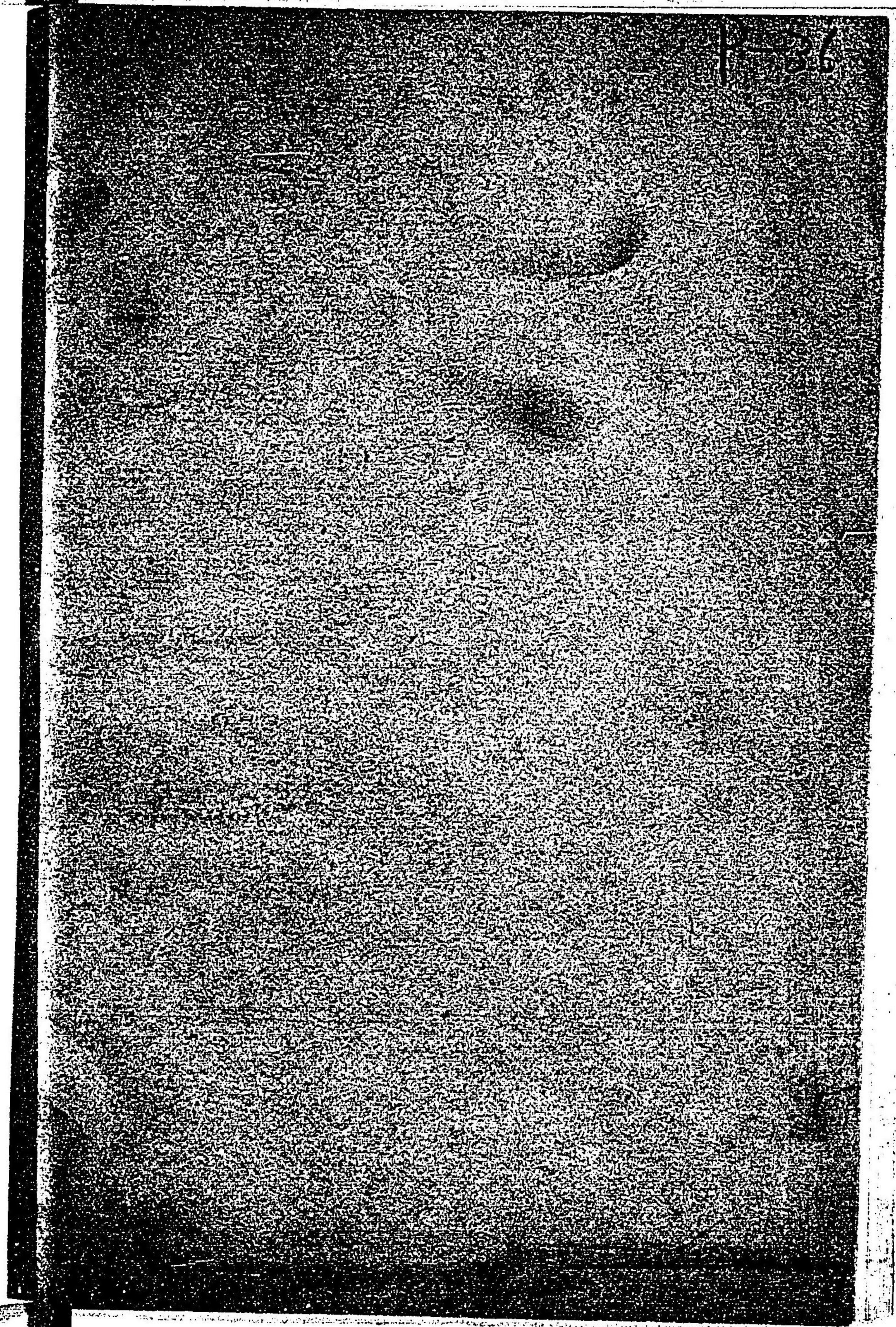
道友社

印刷所

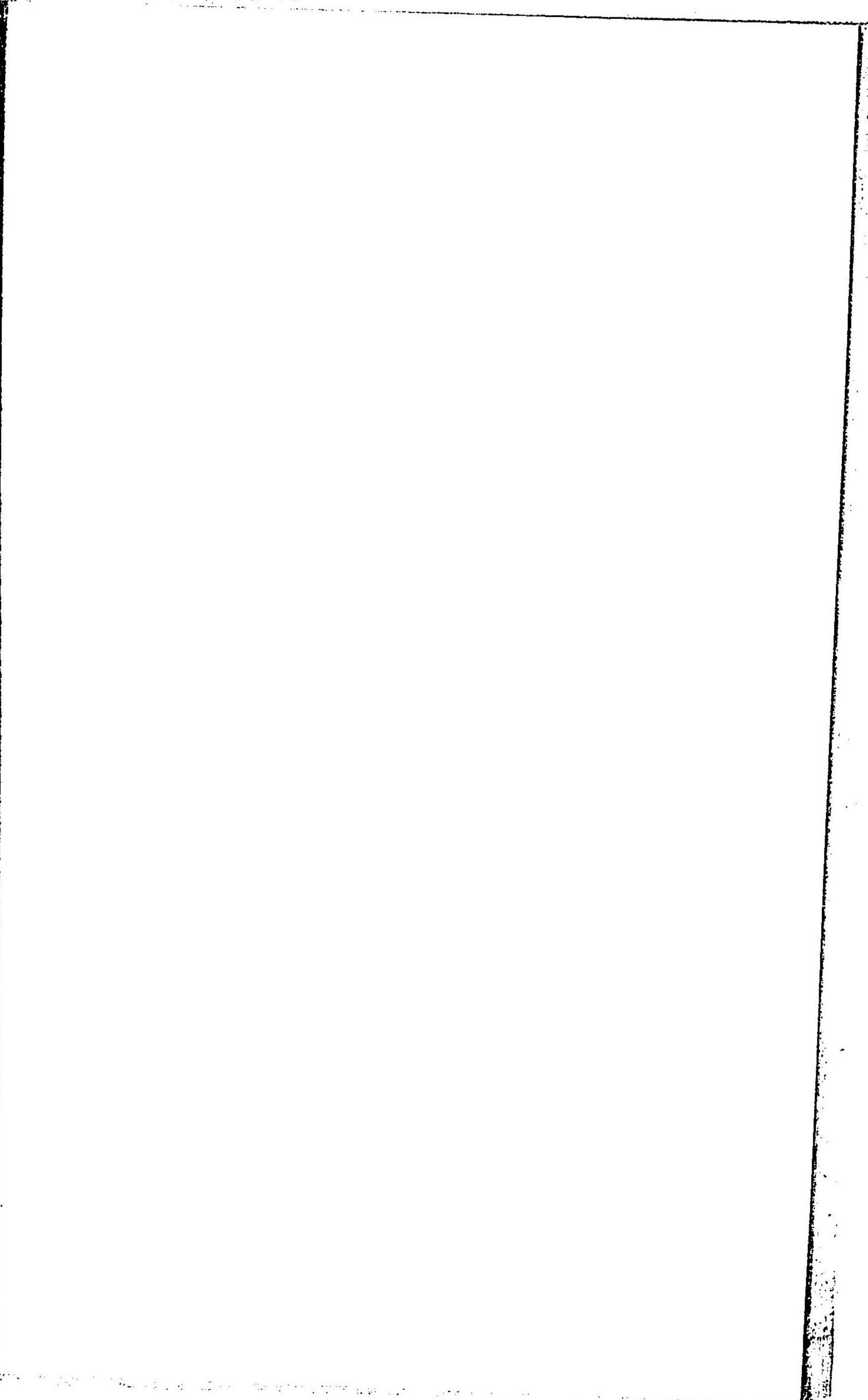
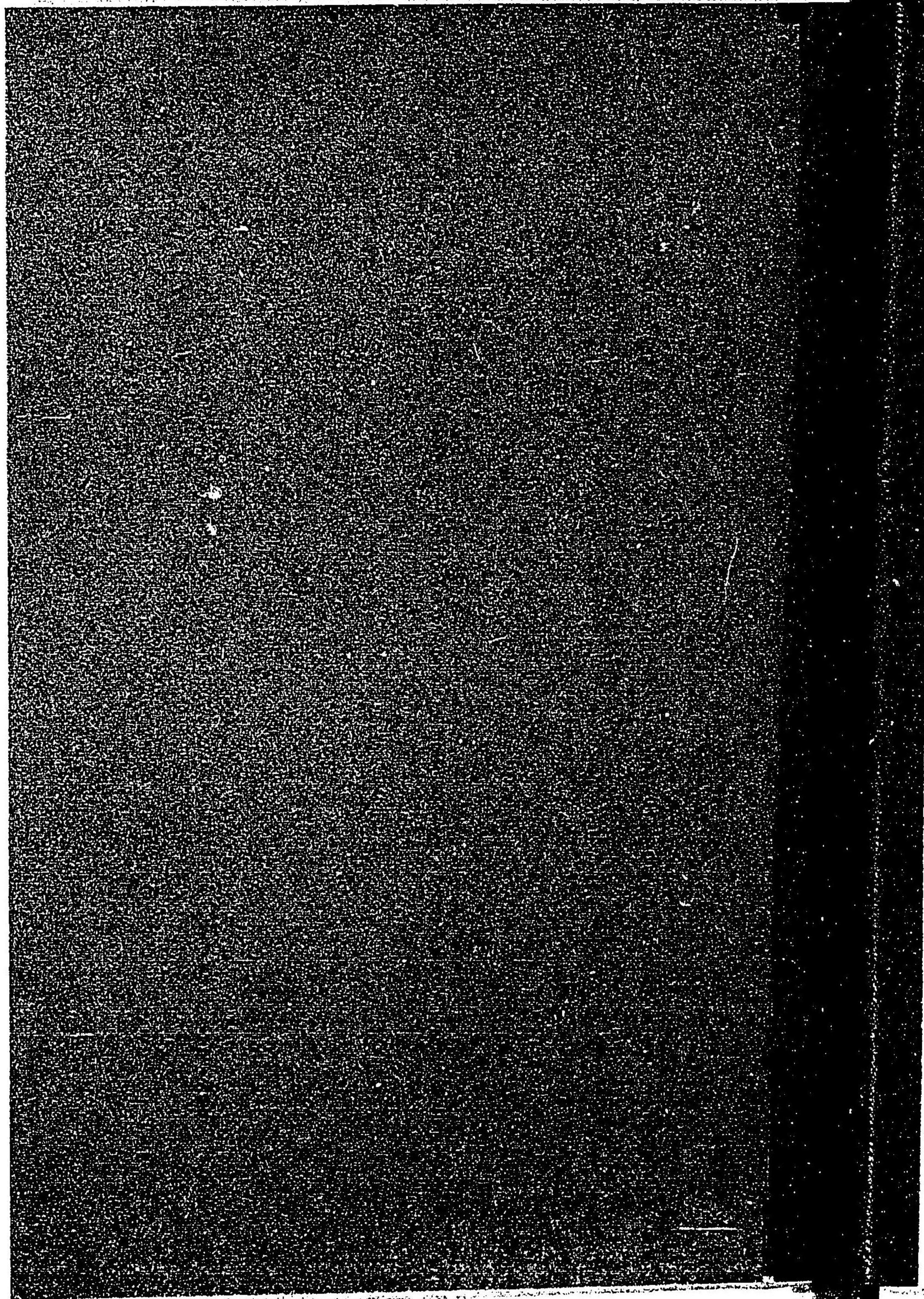
大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

濱田日報社











3



なぐさめぐさ

篠森 乘人

国立国会図書館

014484-000-6

特48-713

なぐさめぐさ

篠森 乘人/編

M38

ABB-0862



特  
7



